

特256
480



0032116-000

特256-480

秋田県勢要覧

秋田県

昭和5

AFB

特256

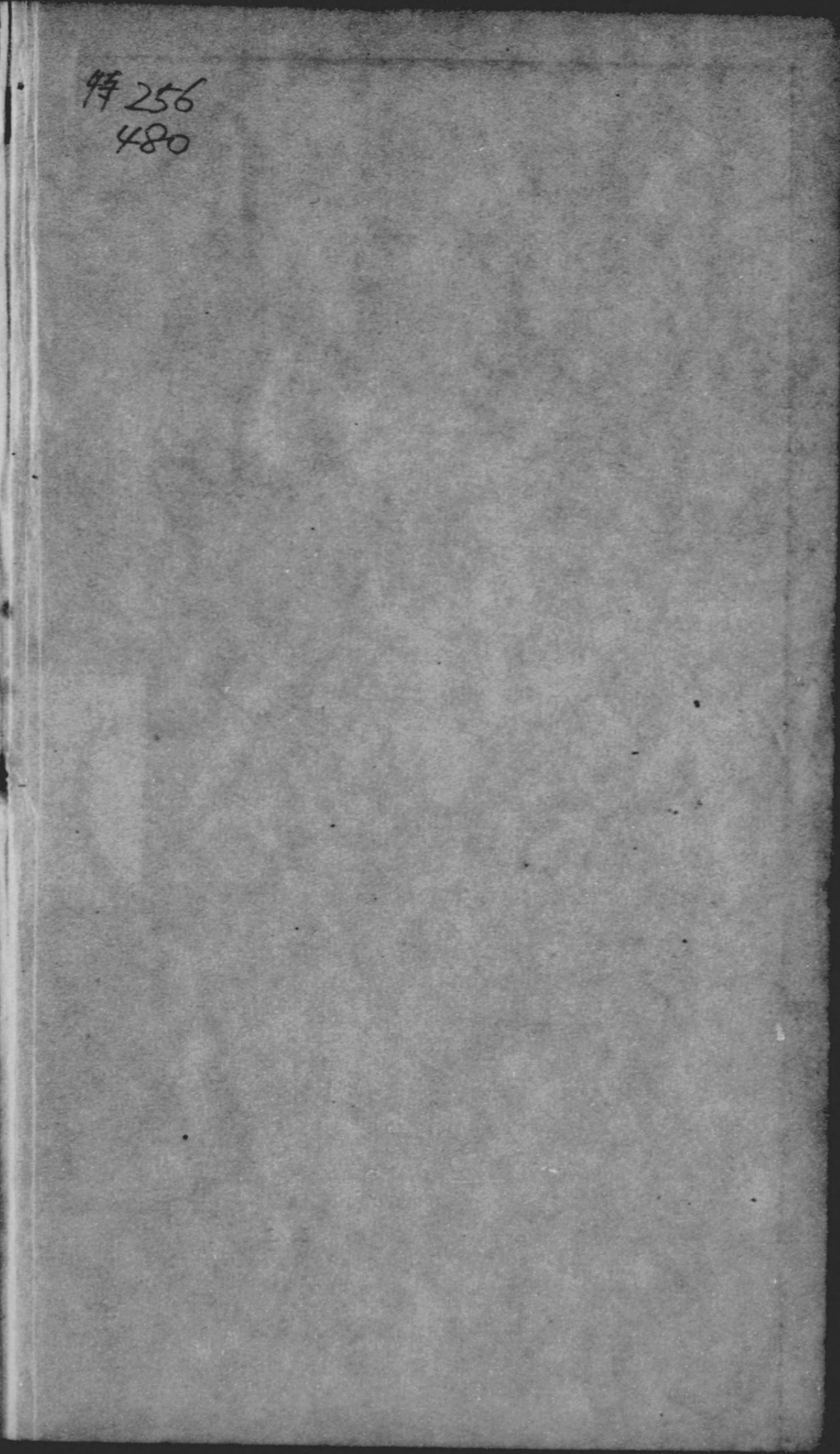
480

秋田縣勢要覽

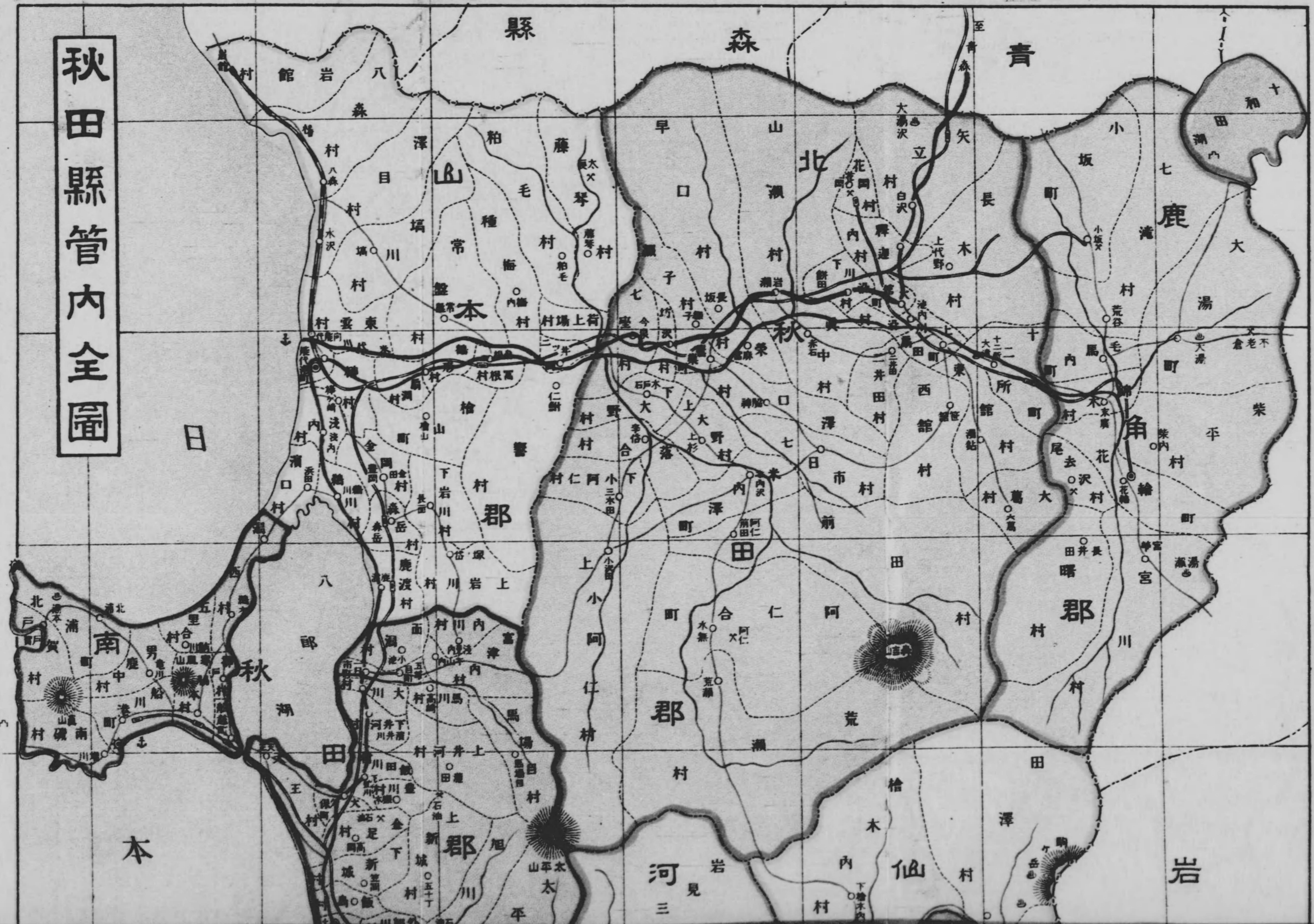
秋田縣



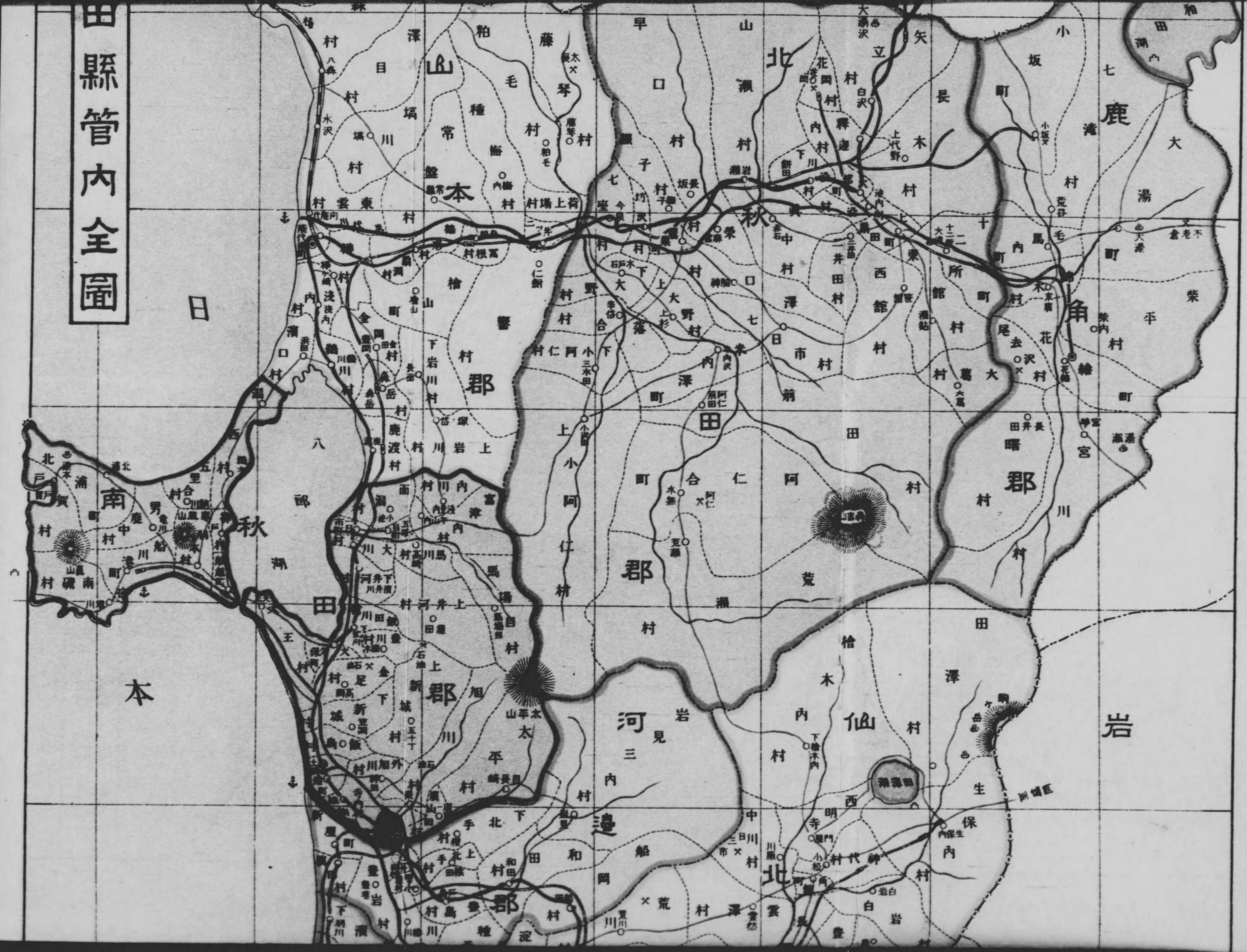
特 256
480

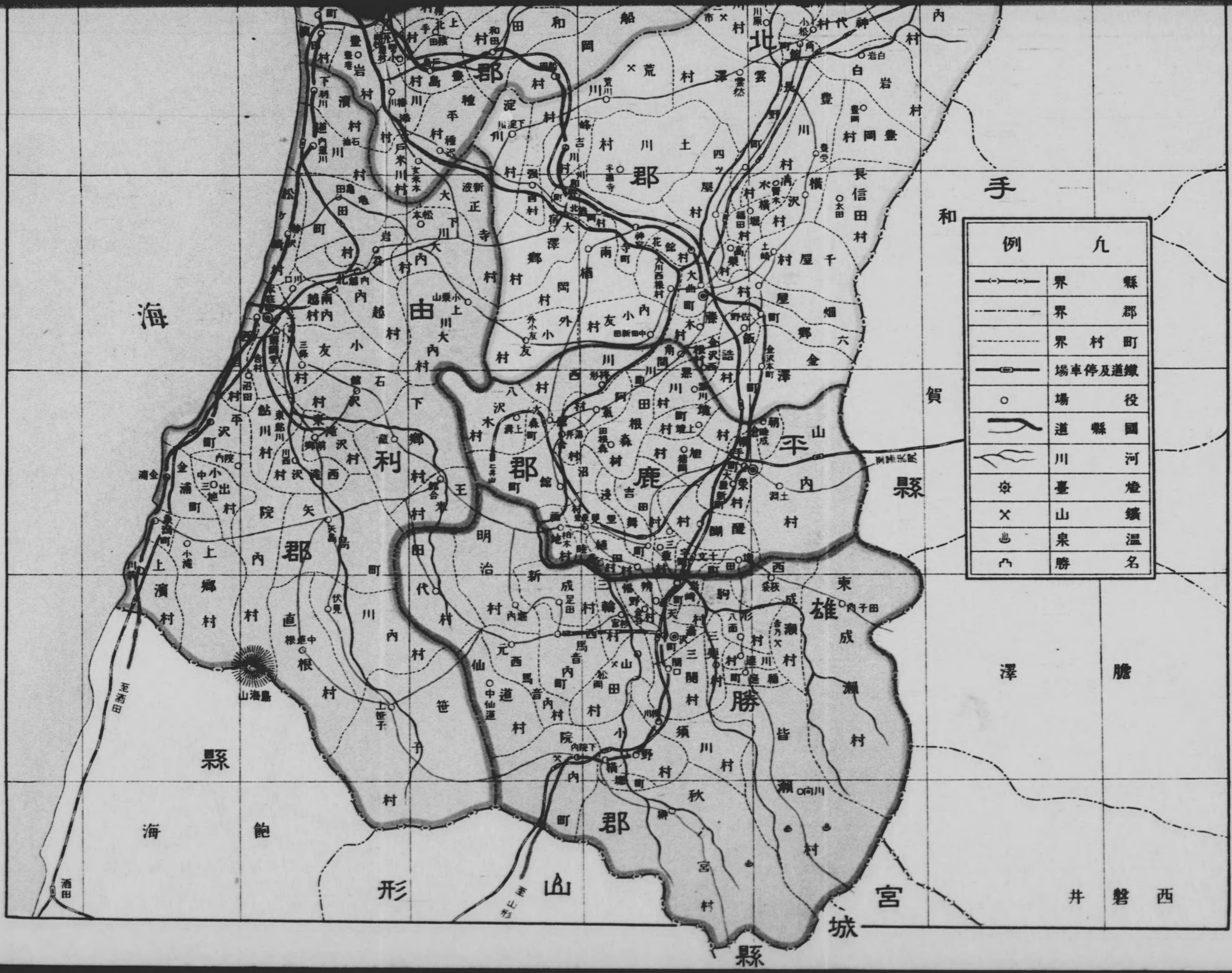


秋田縣管内全圖



田縣管內全圖





例 九	
	界 縣
	界 郡
	界 村 町
	場 車 停 及 道 鐵
	場 役
	道 縣 國
	川 河
	臺 燈
	山 嶺
	泉 温
	勝 名

秋田縣勢要覽目次



總說

第一章	總說	1
第一節	位置及地勢	1
第二節	土地	1
第三節	氣象	1
第四節	戶數及人口	1
第五節	生產及負擔	1

地方行政

第一節	行政區劃	1
第二節	市町村指導監督	1



第三節 財源行政……………一四
 縣の財政、市町村の財産、縣の財産、市町村の財産、地方債

第三章 教育

第一節 初等教育……………三〇
 小學校、學齡兒童、教員、教員住宅
 第二節 師範教育……………三二
 第三節 中等教育……………三三
 中學校、高等女學校、實業學校
 第四節 實業補習教育……………三七
 實業補習學校、實業補習學校教員養成所、實業派遣生
 第五節 各種學校……………三九
 第六節 盲啞學校……………三九

第七節 幼稚園……………四〇
 第八節 育英事業……………四二
 第九節 教育會……………四五
 第十節 秋田縣教員互助會……………四六

第四章 兵事及社寺

第一節 兵事……………四七
 第二節 社寺……………五四
 第三節 史蹟名勝天然記念物……………五六

第五章 土木

第一節 道路……………五八
 第二節 治水……………六一

第三節 港 灣……………六三

第六章 產 業

第一節 農 業……………六六

農事指導獎勵、稻作、畑作、果樹、耕地整理及土地改良事業
農事試驗場、穀物検査、縣農會

第二節 蠶 絲 業……………八五

桑園、養蠶、製絲、蠶業取締所、蠶業試驗場、農事講習所、
蠶絲業に関する團體

第三節 畜 産……………九〇

產馬、產牛

第四節 林 業……………九三

一般施設、模範林、縣行造林、公有林野の整理、公有林野造

林補助、林野改良造成補助、樹苗養成補助、荒廢地復舊補助
民有林造林補助、木炭検査、木炭倉庫建設補助、林業技術員
設置補助、保安林開墾制限禁止施設、特殊樹種の植樹、私有
林指導、林業試験、森林組合

第五節 水 産 業……………一〇三

一般施設、水産試験場、漁船、水産會、漁業組合

第六節 商 工 業……………一〇七

秋田縣物産館、工業試験場、定期航路

第七節 鑛 業……………一一〇

鑛區數及坪數、鑛産額

第七章 産業組合及農業倉庫

第一節 産業組合……………一一三

第二節 農業倉庫……………一七

第八章 社會事業

第一節 社會事業に關する機關……………一二一

秋田縣社會事業調查會、秋田縣社會事業協會、方面委員制度

第二節 兒童保護……………一二三

育兒相談所、托兒所、幼兒保育所

第三節 感化教育……………一二八

秋田縣陶育院

第四節 經濟保護……………一二九

住宅供給、公益質屋、公設市場、宿泊保護、共同浴場、授產

事業

第五節 勞働保護……………一四一

職業紹介所、出稼勞務者保護組合……………一八六

第六節 罹災救助……………一四四

第七節 窮民救助……………一四四

感恩講、軍事救護

第八節 行旅病人及行旅死亡人取扱並精神病者監護……………一四七

第九節 醫療保護……………一四八

診療所

第十節 教化事業……………一五〇

秋田至仁會、秋田縣教化事業聯合會

第十一節 社會教育……………一五一

青年訓練所、青年團、女子青年團、成人教育、圖書館

第九章 警察及衛生

秋田縣勢要覽

第一章 總論

第一節 位置及地勢

位置 本縣は奥羽の西北に位し、羽後國及陸中國の一部を管轄し東西三十里南北四十二里、面積七百六十方里餘にして管内の經緯度左の如し

方位	地	名	經	度	廣	方位	地	名	緯	度	表
極東	鹿角郡大湯町不老倉	東經	140°55'	30里	極南	雄勝郡秋ノ宮村役内	北緯	41°55'	30里		
極西	南秋田郡北浦町	東經	136°33'		極北	北秋田郡山形村	北緯	40°38'			

秋田縣の地勢は、奥羽の西北に位し、羽後國及陸中國の一部を管轄し東西三十里南北四十二里、面積七百六十方里餘にして管内の經緯度左の如し

第一章 總論

第一節 位置及地勢

位置 本縣は奥羽の西北に位し、羽後國及陸中國の一部を管轄し東西三十里南北四十二里、面積七百六十方里餘にして管内の經緯度左の如し

地勢 東北は岩手、青森二縣に南は宮城、山形兩縣に界し西は日本海に面せり、地勢概して東より西に峻夷すと雖中央火山脈の支脈縣内に走りて中央部に森吉山、太平山等の山嶺を形つくり或は男鹿山脈となりて八郎湖を隔てて半嶋を爲すあり。河川は雄物川を最大となす、其の源を山形縣との境なる東安山に發し縣の中央部を流ること三十八里餘、雄勝、平鹿、仙北、河邊、南秋田五郡の諸川を合し土崎港に於て海に注ぐ、之に次くは米代、子吉の二川にして河水汎濫の虞尠からすと雖運輸灌漑の便亦大なり。又湖沼に名を爲すもの三あり、一は八郎湖にして南秋田、山本兩郡に跨り男鹿半嶋に依りて日本海と離隔せられ周圍二十里、二は十和田湖にして周圍十二里鹿角郡(青森縣と連接す)に在り湖面海拔千四百八十六尺沿岸屈曲に富み十箇の灣あるを以て湖名亦十灣田を稱す、三は田澤湖にして仙北郡に在り周圍四里餘清透紺碧、水深三百二十五尋に達し本邦著名湖沼の一とす。

海田湖沼要覽

第二節 土地

昭和四年一月現在に於ける官有、民有合計所有反別は七十六萬二千八百二十六町歩にして其の種別左の如し

種別	官有	民有	合計
耕地(田)	101,232	106,342	207,574
宅地	1,645	3,593	5,238
山林	203,579	103,885	307,464
原野	5,277	100,810	106,087
其他	5,292	1,336	6,628

附記 民有には以上の外免租地九千五百十四町三反歩、民有年期地免租千九百十三町六反歩、有租二千八百四十五町五反歩、計四千七百五十九町一反歩を有す

第五節 氣象

本縣の氣温は縣南沿岸部に高く縣北山間部に低くして秋田市にては累年の年平均氣温は攝氏十度四分にて、酷暑期八月に於ては日々の最高氣温は二十九度にして酷暑期一、二月に於ては日々の最低氣温は氷點下五度なり、降水の累年平均に於ける年總量は千八百十九耗にして夏季は豪雨の時期なるを以て其の量多く百九十耗内外にて又冬季は連日飛雪を齎らすも其の量は年中の最少期にて二月及三月は百耗内外なり、天氣は十二月より三月に亘る寒冷期は滿天濃雲に蔽はれ日々降雪に接するも八月より十月に亘る期間には好晴なる天氣持續するを例とす、今昭和四年に於ける氣象一斑を摘録すれば左の如し

	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	年
平均氣温	三・三	三・五	七・一	一三・三	一八・四	二二・二	二五・一	二七・七	二七・九	二三・七	一七・九	一三・七	一〇・五
平均湿度	八七	八七	八三	八二	八二	八二	八七	八七	八三	八三	八四	八四	八二

日照時數	降水量(耗)	降水日數	天氣日數		
			晴天	快晴	曇天
二、八四	二、四二〇・九	二七	二	一	三
六、七〇・二	二、三〇・七	二七	三	一	三
二、二九・七	二、三六・七	二八	八	二	三
二、〇八・三	八、八〇・八	二〇	一〇	一	一
二、三三・二	二、二〇・三	一〇	六	三	三
二、二五・八	二、五三・三	一〇	八	二	三
二、四八・八	二、〇四・四	一四	二	一	一
一、七五・四	一、八四・五	一四	二	二	三
一、〇〇・六	六、四二・一	三	三	一	一
八、〇三・二	三、五八・六	三三	一〇	一	三
二、五五・五		三三	二二	一	三

第四節 戸數及人口

人口靜態 本縣の現住人口は九十六萬五百人にして男百に對する女は九九・六一に當れり、現住人口一方里平均千二百七十四人にして全國平均の約二分の一に當り密度稀薄なり、今戸數及人口等の趨勢を左に掲ぐ

人口動態 其二 (出生及死産)

年	出生		死産	
	人口千ニ付出生	出生女百ニ付男	死産總數	死産女百ニ付男
昭和三年	四〇・五	一〇五・六一	二・五三〇	一一五・六六
昭和二年	四〇・九二	一〇四・九七	二・六四六	一〇八・九四
昭和元年	四一・八	一〇四・三九	二・八三二	一一三・六六
大正十四年	四二・四三	一〇四・三三	二・八三二	一一三・〇〇
大正十三年	三九・九四	一〇四・三六	二・八四〇	一一三・九
大正十二年	四〇・五二	一〇五・八一	三・一六三	一一六・五〇
大正十一年	三八・三六	一〇三・九二	三・〇三〇	一一三・九三
大正十年	四〇・一九	一〇七・九九	三・一七九	一一四・〇〇
大正九年	三九・七三	一〇五・三三	三・三三三	一一〇・八
大正八年	三四・九二	一〇三・九八	二・九七七	一〇六・四
大正七年	三六・一九	一〇四・二三	三・四〇一	一〇六・八

人口動態 其三 (死亡)

年	死亡		人口千ニ付出生	出生女百ニ付男	死産總數	死産女百ニ付男
	男	女				
昭和三年	一〇,八九〇	一〇,〇六八	三三・三	一〇八・六一	二・五三〇	一一五・六六
昭和二年	一〇,全六	一〇,一四九	三三・三	一〇四・九七	二・六四六	一〇八・九四
昭和元年	一一,三七〇	一〇,五〇〇	三三・六	一〇四・三九	二・八三二	一一三・六六
大正十四年	一一,〇六九	一〇,四八	三三・三	一〇四・三三	二・八四〇	一一三・〇〇
大正十三年	一一,六四	一一,三三	三三・三	一〇四・三六	二・八四〇	一一三・九
大正十二年	一一,三三	一一,〇一〇	三三・三	一〇五・八一	三・一六三	一一六・五〇
大正十一年	一一,七五一	一一,〇一〇	三三・三	一〇三・九二	三・〇三〇	一一三・九三
大正十年	一二,〇七九	一一,〇一〇	三三・三	一〇七・九九	三・一七九	一一四・〇〇
大正九年	一二,〇七三	一一,六六	三三・三	一〇五・三三	三・三三三	一一〇・八
大正八年	一一,九三三	一一,六六	三三・三	一〇三・九八	二・九七七	一〇六・四
大正七年	一二,四六七	一一,一七〇	三三・三	一〇四・二三	三・四〇一	一〇六・八

第二章 地方行政

第一節 行政區劃

本縣は一市四十七町百九十箇村より成り町村役場數二百三十四にして山本郡には二ツ井町荷上場村、扇淵村鶴形村、八森村岩館村の三組合役場あり。

市	町	村	一方里ニ付人口	平均一町村ニ付人口
秋南市	1	1	9,330	9,330
鹿角郡	4	6	5,330	9,330
北秋田郡	6	6	9,330	9,330
山本郡	3	3	1,269	9,330
南秋田郡	7	7	1,980	9,330
計	21	21	19,800	9,330

河邊郡	由利郡	仙北郡	平鹿郡	雄勝郡	計
58,600	101,000	133,400	38,600	85,400	315,000
1	6	7	7	6	27
1	3	3	1	1	9
1,000	1,100	1,166	2,875	1,107	1,250
22,211	3,638	3,357	4,446	3,788	38,086

第二節 市町村指導監督

大正十五年六月三十日を以て第一次監督官廳として四十九年の歴史を有する郡長の廢止せられたるは畢竟町村事務の進歩したる結果に依ると雖尙直接事務の監督指導を遺憾なからしめむか爲新に地方課を設置したり、而して之が圓滿なる進行を期する爲郡部を三區に分ちて各區に事務官及屬、書記を配屬して専ら

事務の指導監督に當らしめつつあるか實地の監督に在りては事務官及屬をして
 嚴密なる事務の監査を行はしむると共に一面には懇切なる指導を加へ以て事務
 の改善刷新を圖らしむるに努めつつあり。

第三節 財 政

縣の財政 府縣制施行前即ち明治二十二年度に在りては一箇年の經費貳拾六萬
 圓なりしか明治三十二年度は六拾五萬圓、同四十二年度は九拾四萬圓、大正元
 年度は百四拾萬圓、大正二年度に於ては整理節約を加へ約拾五萬圓を減し百貳
 拾九萬圓となり、同三年度は貳拾參萬圓に減したるも漸次増嵩し同十二年度は
 五百貳拾九萬圓を計上するに至れり此の年度には郡制廢止に關聯する費額四拾
 萬六千餘圓を包含するを以て之を差引き前年度に比すれば貳拾參萬貳千圓を減
 し更に實行豫算の人件費に於て拾壹萬參千餘圓を節約し大正十三年度は更に整
 理緊縮を加へ前年度に比し九拾四萬貳千餘圓を減したり、昭和二年度に於ては

郡役所廢止に依り相當の節約をなしたるも港灣費及教育、勸業費等に於て前年
 度より九拾萬圓を増加し昭和三年度に於ては御大典記念事業及土木、教育、勸業
 費其他に於て前年度より八拾八萬四千圓を増加し昭和四年度に於ては土木費、
 港灣費、勸業費其他に於て百參萬參千餘圓を増加したり、昭和五年度に於て
 は整理節約を加へ約百拾壹萬貳千圓を減したり、今大正九年度以降に於ける豫
 算額を掲ぐれば左の如し

年度	豫算額 (千円)	増減事由	年度	豫算額 (千円)	増減事由
大正九年度	三、六六		大正五年度	四、五九六	學校移管及堆物川改瓦工事費分擔金ノ増加
大正十年度	四、六五五	産業、土木建築施設ヲ爲ス	昭和元年度	五、四九七	堆物川改瓦工事費分擔金ノ増加
大正十一年度	五、三三	産業、土木建築施設ヲ爲ス	昭和二年度	六、三八一	御大典記念事業及土木建築施設ヲ爲ス
大正十二年度	五、五八	前年度ノ事業ヲ繼承ノ外郡制廢止ニ因ル移管費ヲ含ム	昭和三年度	七、四二	勸業費、港灣費、土木費
大正十三年度	四、三五六	整理緊縮ヲ爲ス	昭和四年度	六、三〇二	支出額ノ増加
大正十四年度			昭和五年度		整理緊縮ヲ爲ス

大正四年度

三三三

整理費額を為す

尙昭和五年度豫算財源左の如し

科 目	金額	税 率	備 考	科 目	金額	備 考
地租附加税	一、五七〇	千円 住宅地 其他 三三三	制限三〇間及八〇間ニ付六割八分ノ超過ナリ	財産收入	千円 七	
特別地租	二六	六三	制限三〇間及八〇間ニ付六割八分ノ超過ナリ	國庫下波金	二二	
營業附加税	二六	六三	制限三〇間及八〇間ニ付六割八分ノ超過ナリ	分 擔 金	三	
所得附加税	四〇	六二	制限三〇間及八〇間ニ付六割八分ノ超過ナリ	國庫補助金	七八	
營業附加税	二二	六二	制限三〇間及八〇間ニ付六割八分ノ超過ナリ	國庫交付金	三	
營業附加税	八五	六二	制限三〇間及八〇間ニ付六割八分ノ超過ナリ	寄 附 金	六	
家屋税	五八七	六二	制限三〇間及八〇間ニ付六割八分ノ超過ナリ	使用料及手数料	六八三	

財政整理表

科 目	當 初 豫 算			前年度豫算ニ對スル	
	昭和三年度	昭和四年度	昭和五年度	昭和四年度	昭和五年度
教育費	一、二四七、一八二	一、二八九、六〇七	一、二七二、一八三	一	一
土木費	一、二二四、四九四	一、九七〇、九五〇	八八五、二〇三	八六、四五六	一、〇八五、七四七
衛生費	五六、六六〇	五四、九六六	七三、七二六	一	一
増額一減額				増額一減額	増額一減額
				一、七六三	一七、七四八

雑種税	雑收入
五七	二九七
三、五六	八四二
	二、七六
	六、三〇三
歳入合計	

歳出合計	其他諸費	縣債費	會議費	縣官吏吏員費	警察費	勸業費
六、八六、六四	一、一〇五、三三	九八三、八四	三、八七、〇五	三三、六六	六四九、七九	一、〇五、八六
七、四二、九六	一、三二、六四	九三三、七九	三、九、六七	二七、八九	六八九、六三	一、二六、八五
六、三〇、一八	一、七八、六四	七、〇五八	四、三、九四	二四、三〇〇	六七、三九二	一、〇三、〇五
一、〇三、三三	一、六、四三	九、九〇四	九、七三	—	九、八三三	八〇、九七
—	—	—	—	二、八九四	—	—
—	三五七、〇〇	—	二、九二七	—	—	—
一、一三、七〇	—	二、五、九一	—	—	—	二四、五五

市町村の財政 世運の進展に伴ひ町村の事務益々多きを加へ従つて其の豫算も亦膨脹せざるを免れずと雖町村制實施當初に在りては僅に貳拾五萬圓を出てさりしか明治三十年度百六拾萬圓、大正元年度貳百貳拾萬圓、大正十年度六百九拾貳萬圓更に昭和四年度は壹千四拾萬圓を算するに至れり斯の如く地方財政の累増する現況に鑑み政府は我國財政經濟の堅實なる發達を圖らむか爲中央財

政と併せて地方財政の一大整理緊縮を斷行すへき旨數次に涉りて訓令通牒せられ縣は之に基き各市町村に對し極力財政の整理緊縮を敢行すへきを強調したる結果昭和四年度市町村一般會計當初豫算に對し五分六厘六毛現計豫算に對し六分二厘六毛の緊縮を爲したり更に昭和五年度豫算に付ても此の方針を以て編成せしめたる結果昭和五年度豫算は昭和四年度當初豫算に比し九分三厘の緊縮を圖るに至れり、今市町村豫算の大要を掲ぐれば左の如し

歳入

科目	市		町村	
	昭和五年度	昭和四年度	昭和五年度	昭和四年度
市町村税	四、五〇、三八九	四、五八、六九八	六、三〇、九三五	五、五七、四一三
夫役	—	—	六、九、三九七	六、九、四二九
財產收入	一、六、三三	一、八、三三	三、六、〇二四	四、九、二八七
増	—	—	—	—
減	—	—	—	—
昭和五年度	四、五〇、三八九	四、五八、六九八	六、三〇、九三五	五、五七、四一三
昭和四年度	—	—	—	—
増	—	—	—	—
減	—	—	—	—

使用料及手数料	一四七、三八九	一四三、四四七	三、九四三	—	三九、九一六	四三〇、六四八	—	二一、五三三
國庫下渡金	三六、〇三六	三三、四八六	二、五五〇	—	一、二六九、三七四	一、二四四、九二四	—	二四、四六〇
國庫交付金	一四、八七八	一五、〇五〇	—	—	二〇三、三六五	一、五五、四三三	—	四七、九三〇
國庫補助金	五、二四二	二、九四三	二、二九九	—	九、四二七	三、三〇八	—	六、二一九
寄附金	五、二〇〇	一三、七二〇	—	—	一九八、九〇二	二五〇、七二八	—	五二、八二七
縣補助金	七、〇五二	四七、五九〇	—	—	二〇五、四一七	二五三、四九一	—	四八、〇七四
繰入金	四、二〇〇	—	四、一〇〇	—	三三、五一九	二二、四二七	—	八八、九一八
財産賣拂代	—	—	—	—	三五、三三八	七七、九一〇	—	四二、五七三
前年度繰越金	三三、〇一六	二二、五三三	—	—	三二〇、三三八	三五七、四〇八	—	四七、〇六〇
雑收入	三三、三九二	三七、八七五	—	—	二九四、九六五	三五八、七七二	—	—
市町村債	五〇、〇〇〇	五〇、〇〇〇	—	—	四九二、七三〇	七五〇、二〇九	—	二五七、四八九
其他	六二、七七三	五九、九〇四	—	—	二七、四三三	三七、二二七	—	九、七八五
合計	八四一、一八七	九〇一、九八五	—	—	七、七九八、五二八	八、四六三、二〇〇	—	八八五、一八四

神社費	一〇〇	一〇〇	—	—	一八、三三三	一七、九二六	—	—
會議費	二、一七一	二、二一一	—	—	五五、七八四	六四、九三三	—	九、一四二
役場費	九六、〇一八	一〇〇、三三七	—	—	四、二九九	五、二四一、五九三	—	一〇九、八二四
教育費	三三三、〇九二	二五九、一九〇	—	—	三六、一六二	四、一四三、二五四	—	一六三、三三二
土木費	三、七四四	四三、二九九	—	—	三六、五三三	四三〇、八八〇	—	九四、三五五
衛生費	三〇、六九八	三三、七三三	—	—	四七、六六〇	五三、三三七	—	六四、八五七
勸業費	三、九六一	二、三三三	—	—	一一、六四二	二八、九二七	—	一七、二八六
社會事業費	一三、六七三	四三、五九三	—	—	六三、〇二四	四一、六三四	—	—
地方改良費	四、六八四	六、二七八	—	—	一、五九四	四九、三七二	—	六、五〇五
合計	五八〇、〇〇〇	六八〇、〇〇〇	—	—	一、五九四	一、八三三	—	—

土地建物……參百五拾七萬八千圓
 基金及資金……百七拾參萬五千圓
 牛 馬……八萬七千圓
 船 舶……五拾六萬九千圓
 電柱及電話……拾五萬壹千圓
 計……六百拾貳萬圓

〔附記〕 各種の基金

- (一) 慈惠賑恤基金 英照皇太后、明治天皇、照憲皇太后の大喪に丁り下賜せられたる整理公債證書、現金及大禮に際し下賜せられたる現金を基本としたるもの現在額參拾七萬壹千圓。
- (二) 罹災救助基金 罹災救助基金法に依り蓄積したるもの現在額壹百萬九千圓。
- (三) 教育資金 教育基金令に基く積立金現在額拾參萬四千圓。

(四) 地方改良資金 農工銀行法第一條の交付金を以て引受けたる株式を基本とし現在額拾六萬圓。

(五) 兒童就學獎勵基金 聖上陛下御成婚に際し下賜せられたる金壹萬七千五百七圓を基本としたるもの現在額四萬五千圓。

(六) 青年團體獎勵基金 秋田縣青年團體獎勵基金設置及管理規程に依り蓄積したるもの現在額壹萬六千圓。

市町村の財産 昭和四年三月三十一日現在に於ける市町村財産は經濟全般の爲に設備するもの總額貳千五百七拾參萬八千八百九拾八圓にして其の内譯左の如し

土地……貳千九拾七萬九千貳拾壹圓
 建物……六拾五萬四圓
 立木……八拾貳萬四千八百四拾壹圓
 現金……貳百四萬九千八百拾四圓

公債及株券……拾九萬五千八百九拾貳圓
 其 他……參萬九千貳百貳拾六圓
 又特定の目的の爲に設備するもの總額四百六拾貳萬壹千五百參拾九圓にして其の内譯左の如し

地……貳百四拾八萬四千四百八拾圓
 立 木……貳拾壹萬參千八百貳拾五圓
 公債及株券……拾萬六千四百五拾五圓
 穀 物……拾參萬參千七百四拾圓
 現 金……百六拾七萬九千九百參拾九圓
 其 他……參千百圓

以上の外積立金穀七拾壹萬五千貳百八拾八圓、部落有財産七百參拾七萬千四百拾四圓に達せり。

地方債 昭和五年三月末現在に於ける市町村其他公共團體に於ける起債總額

は四百六拾六萬千四百八拾四圓にして其の種別を左に掲ぐ

區 分	金 額
市 債	一、二二六、三二〇圓
町 村 債	三、二〇八、七一九圓
水利組合債	二二六、五五五圓
更に之を目的別に區分すれば左の如し	
區 分	金 額
教育費	一、七〇六、四八七圓
衛生費	一、〇九三、〇四七圓
農業費	八二五、六八五圓
普通土木費	三〇三、〇五三圓
災害土木費	一〇〇、八五〇圓
電気事業費	二四八、四一五圓

社會事業費 二五七、二七二圓
 水利費 一四七、五二七圓
 舊債償還費 一一五、〇〇〇圓
 財產費 八三〇、〇四八圓
 警備費 三三三、〇〇〇圓
 役場建築費 一〇三、〇〇〇圓

之を利率別に區分すれば左の如し

利率	市債額	町村債額	水利組合債額
無利率	一、〇〇〇	一、五〇〇	一、〇〇〇
五分未満	六二、八七五	九三〇、八八七	一、〇〇〇
五分以上	三、九四八	五〇一、一四〇	三、〇〇〇
六分以上	一、〇八、六七三	一、三五、八六八	一、四九、九三九

利率	市債額	町村債額	水利組合債額
七分以上	六〇、四三〇	四〇六、六八六	二六、三六九
八分以上	二、二九四	四八、八〇三	一、〇〇〇
九分以上	一、〇〇〇	八、八六六	一、〇〇〇

第三章 教 育

第一節 初 等 教 育

小學校は昭和五年六月調に依れば尋常小學校百、尋常高等小學校二百七十一、高等小學校一、計三百七十二外に分教場百二十六にして其の學級數三千五百あり。

學齡兒童の就學並出席に關しては明治四十二年訓令を發し各郡市町村の標準歩合を示し極力激勵したる結果最近十數年間は就學歩合に於ては男女共九九%以上に達せり、而して其の猶豫、免除の者は殆んど疾病、不具、癱疾の者なり、其の出席歩合亦九七%内外を示すに至れり。

教員は昭和五年五月の調査に依れば正教員男二千八百八十八名、女九百九十八名計三千八百八十六名にして此の充實歩合九一%強に達せり、然れとも一面學級の増加あり他面教員の退職等の爲年度末に至れば漸次減少するを免れざるを以て

常に其の補充計畫を怠らざると共に特に師範教育に留意し優良教員の充實を圖り以て時勢の要求に適應せむことを期しつつあり。

郡役所廢止後學校長の責任一層重大なるものあり、學校長の選任を嚴にすると共に教育内容の充實を期し視學は直接指導監督の任に膺るは勿論一方に於ては大正十五年度以來特別教育視察の制を定め昭和三年度に於ては郡市を通して十校の視察を行ひ講評を公にし以て其の進展に資せり、更に中等學校教員をして學事視察員に任命し其の専門學科に就き教育の實際を視察指導せしめ更に教員の研究を奨励するために獎勵金交付の制を設け又各郡市各研究區に於ては自發的に各種専門學科に就き教師を招聘して研鑽怠らざるものあり、漸次成績の向上を見且縣下何れの學校に於ても學校經營案を確立し教育の功程を録し以て累年教育功率を増加するに至れり。

教員住宅は教員の待遇及補習教育の施設等に必要なるを認め明治四十年以來縣費を以て其の建築費の三分の一乃至二分の一を補助したる結果其の總戸數漸次

増加し昭和四年六月一日現在に於て棟數三百三十二、戸數三百六十三に達せり。

第二節 師範教育

師範學校は從來一校として男女を併置したりしも教員補充の急なると校舎の焼失とは之か分離の氣運を促し明治四十一年を以て男女兩校に分離せり、昭和二年秋田縣師範學校燒失せるを以て南秋田郡旭川村に校舎を移轉せり、現在の狀況左の如し

名	稱	位	置	創立年月	學級數	生徒定員	生徒現在數
秋田縣師範學校			南秋田郡旭川村	明治六年七月	本科一部 專攻二部 科	二二三	四八六
秋田縣女子師範學校			秋田市東根小屋町	明治四十一年二月	本科一部 專攻二部 科	一一五	一九四

第三節 中等教育

中學校は縣立六、私立一、高等女學校は縣立九、私立一、町立實科高等女學校四あり、現在の狀況左の如し

名	稱	位	置	創立年月	學級數	生徒定員	生徒現在數
縣立秋田中學校			秋田市東根小屋町	明治六年九月	三	一一三〇	一、〇四八
縣立大館中學校			北秋田郡大館町	明治三十一年四月	一五	七五〇	七〇六
縣立横手中學校			平鹿郡朝倉村	同上	一五	七五〇	六七二
縣立本莊中學校			由利郡本莊町	明治三十五年四月	一一	七五〇	四六五
縣立角館中學校			仙北郡角館町	大正十三年十二月	一〇	七五〇	四〇四
縣立能代中學校			山本郡能代港町	同上	一一	七五〇	四二五
私立將軍野中學校			南秋田郡寺内村	昭和三年四月	三	五〇〇	一七五

縣立秋田高等女學校	秋田市上中嶋町	明治三十四年九月	二〇	一、〇〇〇	九三
縣立横手高等女學校	平鹿郡横手町	大正十二年四月	八	四〇〇	五九
縣立大曲高等女學校	仙北郡大曲町	同上	八	四〇〇	五三
縣立大館高等女學校	北秋田郡大館町	同上	八	四〇〇	五〇
縣立能代高等女學校	山本郡能代港町	同上	八	四〇〇	五七
縣立本莊高等女學校	由利郡本莊町	大正十三年四月	八	四〇〇	五三
縣立角館高等女學校	仙北郡角館町	昭和三年三月	三	一〇〇	二二
縣立湯澤高等女學校	雄勝郡湯澤町	大正十五年四月	四	四〇〇	三〇
縣立花輪高等女學校	鹿角郡花輪町	昭和三年三月	四	一〇〇	一六
町立小坂實科高等女學校	鹿角郡小坂町	大正五年四月	四	一〇〇	一八
町立鷹巣實科高等女學校	北秋田郡鷹巣町	大正二年四月	三	一〇〇	九〇
町立土崎實科高等女學校	南秋田郡土崎港町	大正九年六月	三	一五〇	一四〇

町立増田實科高等女學校	平鹿郡増田町	大正十四年二月	四	二〇〇	二四〇
私立聖澤高等女學院	秋田市龜ノ丁本新町	昭和三年三月	一〇	五〇〇	四〇七

町立實科高等女學校に對しては縣より補助金を交付し内容の改善優良教員の招致に力を致さしむ。

實業學校は縣立大曲、金足各農業學校、鷹巣農林學校、秋田、能代各工業學校、秋田市立商業學校、土崎港町立土崎商業學校の七校あり。
 大曲農業學校は明治二十六年秋田中學校に農業專修科を置きたるに濫觴し時に簡易農學校と稱したる事あり主として普通農事の教育を施す。
 金足農業學校は昭和三年三月の創立にして普通農事の教育を施す。
 鷹巣農林學校は大正二年の創設にして林學を主とし傍ら普通農事の教育を施し來りしか大正十四年度より農業科、林業科に分離せり。
 秋田工業學校は機械、建築の二科を置きたりしも時運の要求に促され明治四十

五年より建築科を廢して電氣科を置き大正十五年より土木建築科を置く。能代工業學校は昭和二年の創設にして機械科、木工建築科を置く。秋田市商業學校は元甲種程度の實業學校にして土崎商業學校は元乙種程度に相當する學校なりしか昭和四年四月元甲種程度となれり、現在の狀況左の如し

名	稱	位	置	創立年月	學級數	生徒定員	現 在 生 徒 數
縣立大曲農業學校		仙北郡大曲町		明治二十六年四月	一〇	五〇〇	三七〇
縣立金足農業學校		南秋田郡金足村		昭和三年三月	二	三〇〇	二二三
縣立秋田工業學校		秋田市保戸野金砂町		明治三十七年四月	九	三五〇	三〇六
縣立能代工業學校		山本郡能代港町		昭和二年四月	三	一五〇	一五三
縣立鷹巣農林學校		北秋田郡鷹巣町		大正二年四月	六	三〇〇	二八〇
秋田市商業學校		秋田市龜ノ丁東土手町		大正九年四月	二	五〇〇	三二二
土崎商業學校		南秋田郡土崎港町		同	三	一五〇	二三八

第四節 實業補習教育

實業補習學校は漸次校數及生徒數共に増加し昭和四年度に於て校數三百二十二校に達し其の種類は商業、工業、農業、水産等に亘り教員數專任三百一名、兼任一千八百四十名、計二千四百四十一名にして生徒數二萬七千五百五名に及へり。縣に於ては大正二年度より成績優良の學校に對して補助金を交付し同九年度より縣補助金壹萬壹千圓を、同十年度は壹萬五千圓、同十一年度は壹萬六千圓、同十二年度は參萬貳千圓を置き郡補助金の半額を補助し郡よりは一校平均約壹百圓の補助金を交付せしめ以て獎勵を加へ更に大正九年十二月秋田縣令第九十八號を以て秋田縣實業補習學校專任教員設置補助規程を設け專任教員の設置を獎勵して内容の刷新に努め尙斯教育の充實發展を期する爲大正十一年十月從來の施設要項に改訂を加へ本縣補習教育施設經營上緊切なる各般の事項を明示し義務教育に準して大正十二年度より之を實施せり更に昭和四年六月從來の施設

要項を廢し新に實業補習學校規程施行細則を制定し一層内容の改善を企圖せり
右規程の實施と共に縣内未設の町村には全部實業補習學校を設立せしむると共に
一方内容の整備改善を圖り更に大正十三年度は斯教育獎勵費として金參萬七
千四百貳拾圓を置き内貳萬七千九百貳拾圓は專任教員の補助に同九千五百圓は
獨立校舎の建築補助金に充て又一方に於ては秋田縣實業補習學校教員養成所を
農事試驗場に併置し優良なる專任教員の養成を企圖し以て本縣補習教育の向上
を促したり尙大正十四年度以降前年に引繼ぎ獎勵費金參萬五千七百拾圓を置き
内參萬參百貳拾圓は專任教員の補助に四千七百五拾圓は獨立校舎の建築補助金
に充當し又更に昭和二年度より水産補習教育費補助金九百四拾圓を支出し以て
水産補習學校の設備の充實を圖れり。

本縣産業の發達を計る目的を以て明治四十三年以來全國優良の實業學校若は工
場を選定して留學生を派遣するの制を定む實業派遣生即ち之なり卒業の上は學
資の給與を受けたる年月間知事の指定したる職務に従事するの義務を負はしむ

大正九年度より日露協會學校に限り毎年二人又は一人の生徒を派遣することと
し月額一人五拾五圓、旅費五拾圓、仕度料百貳拾圓を給與す現在の派遣生一名
なり。

第五節 各種學校

私立秋田女子技藝學校は秋田市下中城町に在り明治四十一年の創立にして女子
に須要なる手藝を主とし傍ら普通學を教授し來りしか昭和四年三月財團法人に
組織を改め以て今日に及へり現在生徒數百十餘名あり。
私立阿仁實科女學校は北秋田郡阿仁合町に在り大正二年の創立にして其の目的
前者に同じく生徒數現在四十餘名あり。

第六節 盲啞學校

縣立盲啞學校は明治四十年四月の設置に係り當初は借家を以て校舎に充用し來
れるか大正七年十二月新に校舎を秋田市長野下新町末南町に新築移轉す現在生

徒數七十六名あり。

第七節 幼稚園

本縣は明治四十四年四月秋田縣女子師範學校に縣立幼稚園を設立せり之と前後して秋田市及郡部に私立幼稚園の設置を見たり其の後逐年増加して現在公立一私立十四、計十五を算するに至る大正十五年四月幼稚園令公布せられ之が制定の要旨に基き幼兒の健全なる發育、善良なる性情の涵養、家庭との連絡、保育の方法、設備の完成等につき指導監督をなし特に保姆の人選を嚴にし且幼稚園に孤兒の預所を附設し或は農繁期に於て小學校に托兒所を開始せしむることに努めつつあり昭和四年更に幼稚園令施行細則を制定す、幼稚園の現況左の如し

名	稱	位	置	幼兒數	設	立	者
秋田縣女子師範學校附屬幼稚園		秋田市東根小屋町		六	秋	田	縣

秋田	幼稚園	秋田市本町四丁目	三	米人	ミセス、ステイアン		
聖使	幼稚園	秋田市保戸野愛宕町	三	米人	イエル、アンテルス		
檜山	幼稚園	秋田市檜山	六	園部	ビ	ア	
聖心愛子會御聖	幼稚園	秋田市保戸野新町	一	獨人	アレ	ジャ	
聖心	幼稚園	秋田市寺町	一	同			人
花輪	幼稚園	鹿角郡花輪町	五	山崎			順
毛馬内	幼稚園	鹿角郡毛馬内町	三	カトリック			教會
尾去澤	幼稚園	鹿角郡尾去澤村	三	尾去澤			山
大館	幼稚園	北秋田郡大館町	三	米國傳道會			社
能代	幼稚園	山本郡能代港町	七	小助川			度
土崎	幼稚園	南秋田郡土崎港町	一	土崎			智
本莊	幼稚園	由利郡本莊町	三	貞重			龜

岩崎幼稚園	維勝郡岩崎町	高橋七之助
昭和幼稚園	秋田市東根小屋町	中泉智法
横手幼稚園	平鹿郡横手町	山崎忠剛
大曲上宮幼稚園	仙北郡大曲町	大曲各宗鶴和會
二葉幼稚園	由利郡本莊町	宣正勲成會
角館幼稚園	仙北郡角館町	空角館佛教會

第八節 育英事業

秋田育英會は明治三十三年の設立にして人材の養成を目的とし總裁には舊藩主佐竹侯爵を推戴す東京には育英館を建設して學生の宿泊に便すると同時に其の監督を爲すに在館生現在四十四名なり、昭和五年七月現在資金拾八萬貳千圓にして其の利金をも以て貸費生を派遣す、貸費を許可すへき學校は大學、高等學校

其の他各種専門學校にして設立以來の貸費學生にして其の目的學校を卒業せる者四百八名、現在貸費學生八十一名、給費生七名なり。栗盛教育團は明治四十四年大館町の富豪栗盛吉右衛門か私財壹萬圓と土地十六町二段歩とを寄附し之を設立し資金の利子を以て學生を派遣す、主として郷里の子弟を教育するにあるも將來資金の充實するに至らば其の區域を擴張すへき見込なり。井坂獎學會は大正十年能代港町故秋田木材株式會社社長井坂直幹の遺志に依り私財拾五萬圓の寄附に依りて設立したるものにして資金の利子を以て同會社關係者の子弟及山本郡出身の學生に貸費し現に各方面に學生を派遣しつつあり。京野育英團は大正十三年湯澤町京野利助か田地約四町歩を寄附して設置したるものにして年々其の収益を以て中等學校以上の雄勝郡出身の學生に貸費す。迂育英團は秋田市辻兵吉か私財拾壹萬圓を寄附して大正十五年十二月設立したるものにして昭和二年度より縣内出身學生に貸費を開始す。

外に大正十四年五月北秋田育英會の設立を見たるも未だ事業を開始するに至らず。

秋田市獎學會は大正九年平野温之助の設立したるものにして基本金壹萬貳千圓なり主として市内生徒兒童の就學獎勵貸費を爲しつつあり。

澤木獎學會は大正十三年澤木晨吉の設立にして基本金壹萬圓なり船川港町在住の中等學校生徒に對し貸費を爲しつつあり現在七名の貸費生あり。

秋田縣北秋田郡育英會は大正十四年河田與惣左衛門外十四名の設立にして郡内の人材養成の爲大學、高等學校、各種専門及實業學校生徒に對し貸費又は給費しつつあり。

秋田縣善誘協會は昭和三年の設立にして警察官吏たりし者の子弟の修學研究補助等の事業を爲し基本金拾萬壹千圓なり。

本縣は土地僻遠に在る關係上優良なる中等教員を得るに困難なる事情あるに鑑み一方育英の目的をも兼ね大正十一年度以降毎年三名宛を募集し學資月額一人

參拾圓を補給して中等教員養成を目的とする學校に留學せしめつつあり現在留學生七名なり又海外發展に資せん爲ハルビン日露協會學校に二名の派遣生を留學せしめつつあり。

第九節 教 育 會

教育會は縣教育會一、郡市教育會十あり其の事業は大同小異にして設置範圍に大小あるに過ぎず、創立最も古きは秋田縣教育會にして明治二十一年時の師範學校長庵地保の首唱に成り教育問題の討究又は演說等に依り教育の上進を圖るを以て目的とし規模小なりしか數回組織の改正を行ひ明治三十四年之を社団法人となし基本金を募集し活動するに至れり同會の事業は雜誌の發行、教育上の研究、教育功勞者の表彰、圖書の出版、初等中等學校の武道獎勵、水泳及冬季運動の施設、彌高神社の經營等にして文部省より其の成績良好なるを認められ大正二年三月金百圓を賞與せられたり、基本金壹萬八千餘圓を有す、大正十三

年六月十日は總會に於て本會を解散し別に郡市教育會の聯合組織に成る縣教育會
 設立せらる該教育會に從來の縣教育會の財產一切を譲與したりしが更に基本金
 増加の計畫を機て各種講習の開催、青年學友の檢定等新味を加へたり。

第十節 秋田縣教員互助會

秋田縣に在職する教員及教育關係者の協力に依りて互助の實を擧ぐる目的を以
 て昭和五年五月三日互助會創立總會を開き各郡市より二名ずつの評議員を選出
 し同五月二十三日評議員會を開き會長以下の役員を選舉し遂に完全に互助會の
 設立を見るに至り同六月より事業を開始し現在に於ては會員數約二千人に達
 す學校教職員及學校醫、縣市教育關係吏員、幼稚園保姆、學校看護婦、圖書館
 職員、縣郡市教育會專任職員を以て會員となす會員は毎月一人壹圓つつ拾五箇
 年拂込み退官、退職、死亡又は會員疾病災害に罹りたる場合には元利還還は國
 より相當の弔慰金慰勞金を贈るを以て主なる事業と爲す。

第四章 兵事及社寺

第一節 兵 事

壯丁學力 明治四十年訓令を發して壯丁夜學會の開設を奨勵し又實業補習學校
 等に於て壯丁教育を施す、累年の成績比較を示せば左の如し

昭 和 元 年	昭 和 二 年	昭 和 三 年	昭 和 四 年
大 學 卒 業 者	1	1	1
大 學 本 學 校 卒 業 者 △ 力 ト 同 者	1	1	1
高 等 學 校 卒 業 者 △ 力 ト 同 者	1	1	1
中 學 校 卒 業 者 △ 力 ト 同 者	1	1	1
高 等 小 學 卒 業 者 △ 力 ト 同 者	1	1	1
高 等 小 學 卒 業 者 △ 力 ト 同 者	1	1	1

昭和四年	昭和三年	昭和二年	大正十四年	大正十三年	大正十二年	大正十一年	大正十年	大正元年
四、二六〇	五、〇七六	三、八〇八	一、一〇〇	二、五〇〇	三、三〇〇	三、〇〇〇	三、〇〇〇	七、〇〇〇
—	—	—	—	—	—	—	—	—
—	—	—	—	—	—	—	—	—
九、四一九	八、五三四	八、六九三	七、〇〇〇	九、九七三	九、七九六	一〇、六二八	一〇、四三九	七、九〇九
九、四一九	九、〇〇三	九、二二三	二、三三三	九、八六六	九、八二二	九、八六六	九、六九九	九、六九九
二、七六六	八、五三七	六、〇七	四、〇〇〇	七、六	一、〇五	八、七	二、五二	三、三三
—	—	—	—	—	—	—	—	—
五、八	六、三	二、四	二、八三三	二、七三四	二、九三八	二、七三三	二、八二九	二、七三三
九、七五三	九、四三三	九、四二四	三、三三三	九、九七三	九、九七三	一〇、七六六	一〇、七二二	八、三三九

昭和元年	大正十四年	大正十三年	大正十二年	大正十一年	大正十年	大正元年
四、一五七	五、五二二	五、四〇〇	五、六四八	五、八六九	五、七五七	三、六五三
—	七、三〇〇	七、五〇〇	一、一五六	一、一九二	一、一八八	八、五八
—	—	—	—	—	—	—
七、九八〇	九、九七三	九、七九六	一〇、六二八	一〇、七九二	一〇、四三九	七、九〇九
九、六九九	九、八六六	九、八二二	九、八六六	九、七六六	九、六九九	八、八五
三、三三	七、六	一、〇五	八、七	一、六七	二、五二	七、五三
—	—	—	—	—	—	—
三、六	六、二	七、四	六、二	一、〇〇	八、二	二、七六
八、三三九	一〇、一一一	九、九七三	一〇、七六六	一一、〇五八	一〇、七二二	八、三三九

壯丁「トラホーム」花柳病の豫防 壯丁「トラホーム」及花柳病患者の撲滅に努め
 明治四十年豫防撲滅の告諭を發し同四十二年規定を設け市町村長は毎年二回一
 二兩月及八、九兩月の間に於て壯丁の檢診を行ひ患者に對しては市町村費を以
 て之か治療を爲す、今累年の成績を比較せば左の如し

體格 徵兵身體檢查累年の成績左の如し

年	人					員					受檢壯丁トノ千分比	平均身長	平均體重
	甲種	乙種第一	乙種第二	丙種	丁種	戊種	甲種	乙種第一	乙種第二	丙種			
昭和四年	三、一六四	一、一九七	二、〇九五	二、五五〇	七四〇	七	三三四	二二二	二二四	二六一	七	一、五九五	五四、二九五
昭和三年	三、三七四	一、二四七	一、七八一	二、五四〇	六〇七	五	三三七	二二二	二八八	二六九	六	一、五九四	五三、七九二
昭和二年	三、八四八	一、二三三	二、五二一	一、五八二	三四六	六	四〇九	二一九	二六六	二六八	七	一、五二七	四四、三〇三

年	受檢壯丁トノ千分比	平均身長	平均體重
大正十二年	九五	七一	二六
大正十一年	七七	二七	三一
大正十年	一六七	二〇九	四九
大正元年	七二	一八三	四九

海軍志願兵條例ニ依ル志願兵

年次	採用者	不採用者	不合格者	計
大正十一年	七四	一三	三一	一〇九
大正十年	九七	一三	六四	一七四
大正元年	三〇	三	三	一七五
昭和四年	九	五	三	一六
昭和三年	二二	八	三	三三
昭和二年	七	九	二	一八
昭和元年	一六	一四	八	三八
大正十四年	一八	一	五	二四
大正十三年	一八	一	一	二〇

昭和元年	三、一七六	一、三三三	一、九六五	一、五三七	二二三	一五	三八五	一六二	三三八	一八七	二六	二	五、二五	一四、三五〇
大正十四年	三、九二一	一、五五三	二、五三三	一、七六八	二七七	二九	三八四	一五〇	二五二	一七	二七	三	五、二五	一四、二六八
大正十三年	三、八三三	一、四〇八	二、六二八	二、六九九	五九八	二〇	三六〇	一四二	二六三	一七〇	〇	二	五、二五	一四、三六八
大正十二年	四、二四〇	一、六九七	二、六六七	一、六九五	四四二	三〇	三九七	一五四	二四八	一七〇	四	三	五、二五	一四、三六八
大正十一年	四、〇五二	一、三三三	三、〇三三	一、八三一	三七五	二四	四〇七	二一九	二七二	一六六	三	二	五、二五	一四、三六八
大正十年	四、七一一	一、七九八	一、八六三	一、七八〇	四七五	一四	四三八	一六七	一七三	一六五	一	一	五、二五	一四、三六八
大正元年	四、一六〇	一、一四三	七五	一、七九八	八二〇	二九二	四六五	二三八	八一	二〇一	九二	三	五、二五	一四、三六〇

備考 昭和三年度より身長體重は米法となる

第二節 社 寺

神社の社格別數 神社の社格別神社數左の如し

國幣小社	縣	社	郷	社	村	社	無格社	計
一	一九	三七	五五	七五	一、三二七			

社殿及財産 明治四十三年一月神社境内社殿の設備並基本財産造成に關する規定を發布し昭和元年度末現在基本金は總額百四萬五千參百八拾四圓にして一社當り七百九拾貳圓、不動産は四千二百八十七町餘あり、又社殿境内完備し相當基本財産を有し神饌幣帛供進指定せられたるもの二百八十三社あり。

神職の養成 現在神職三百十九名中神職任用規則に依る有資格者百三名にして其の他は世襲なり、縣は神職養成の必要を感じ皇典皇究所並神職養成所に入學を奨勵し又秋田縣神職會を指導し明治四十二年より神職養成所を開設せしむ爾來之を修了せるもの百三十名に及び尙大正七年より毎年現任神職の講習を開始し併せて官公吏の神社祭式作法講習の便を計れり。

寺院 宗派別數は左の如し

天台宗	眞言宗	淨土宗	臨濟宗	曹洞宗	眞宗	日蓮宗	時宗	計
三	三九	五七	一七	三八	一九	四九	四	六六

第三節 史蹟名勝天然記念物

大正十年六月一日史蹟名勝天然記念物調査會規程を設け之か調査を爲しつつあり既に指定せられたるもの左の如し

北投石 仙北郡田澤村玉川字澁黒澤鹿湯温泉にあり、大正十一年十月二十二日内務省告示第二百七十號にて指定、北投石は學術研究上重要にして頗る珍奇の

礦物なり、臺灣臺北附近の北東温泉に於て初めて發見せられ此の名あり。

つばき自生地 南秋田郡南磯村椿にあり、大正十一年十月十二日内務省告示第二百七十號にて指定、つばき自生地北限地帯なり。

鯛状硅石及噴泉塔 雄勝郡秋の宮村役内字山居野稻住温泉附近にあり、大正十三年十二月九日内務省告示第七百七十七號にて指定、鯛状硅石は礦物學上重要な研究資料なり、噴泉塔は地質學上往古の記念物なり。

噴泉塔 鹿角郡小坂町小坂字相内にあり大正十三年十二月九日内務省告示第七

百七十七號にて雄勝郡秋の宮鯛状硅石及噴泉塔と共に指定さる。

秋田駒岳高山植物帯 大正十五年二月二十四日内務省告示第十九號を以て指定仙北郡生保内村に在り、コマクサ保護を主眼とす。

長走風穴高山植物群落 大正十五年二月二十四日内務省告示第十九號を以て指定、北秋田郡矢立村に在り低温度と高山植物との關係を識る上に於て重要なものなり。

豎穴群 仙北郡には先住民族の遺跡と目せらるる豎穴多く既に大正十三年九月二十六日秋田縣告示第三百六十四號を以て飯詰村の豎穴郡に對し假指定をなし其の後檜木内、生保内にも豎穴郡あるを發見し目下併せて調査中なり。

秋田城趾 紀元千四百二十一年淳仁天皇太平寶字五年築城せられたる城趾の土壘發見目下調査中なり。

第五章 土木

第一節 道路

本縣に於ける道路は國道府縣道併せて百九十四線此主要延長六百七十里餘にして縣内外の交通要路たり外に市町村道概數延長五千里に達し村落を縫ひ廣袤七百方里に迫ひ本縣の津々に交通の便に供す、昔時治水政策の積極的なりしに反し道路、橋渠稍等閑に附せられたる嫌ありし結果近代の交通用具を收容するに足らず不便少からざりしに鑑み明治五年以降新道の開鑿、舊道の改修に務めたる一再にあらず、其の大略を要記すれば左の如し

道路改修施行調

年次	事項	經費	備考
自明治八年 至明治十一年	生保内湯ノ岱、三崎、矢立、院内、開鑿	……円	青森、山形縣等ト共同シテナシタリ

明治十四年	秋田、水窪開鑿	……	工費不明
自明治十八年 至明治二十年	和田、峰吉川開鑿	三三、二六	
自明治二十年 至明治二十五年	國縣道修築	三六、四七	
自明治二十八年 至明治三十一年	同	二九、二五	
自明治三十四年 至明治三十六年	國縣道十五線修築	八、九三	豫算五拾七萬圓ナリシモ日露戰役ノタメニ中止シタリ
自明治四十三年 至大正四年	縣道九線改修	二〇、〇〇〇	
自大正九年 至大正十八年	大正三年計畫中止セル線及新計畫	……	豫算百九拾四萬四千七拾七圓大正十二年中止

此の外年々行はれたる局部改修或は大修繕等に力を盡したる結果年々逐て改良の緒に就けりと雖既定計畫は種々なる事情のため中途頓挫の悲運に遭ひ或は財政の都合上徹底的計畫樹立を許さざる等道路の廢頽を餘儀なくし爲に時勢の要求日に隆なるに副ふ能はざりき、茲に於て昭和三年度より向ふ七箇年の繼續

事業として國府縣道五十二線を選び約四百五十萬圓の費を投じて改良計畫の實行に着手したり、本縣中央部を縦貫する國道五號線及日本海岸沿線を通する唯一の國道第十號線の二線を徑とし、縦横に織り或す府縣道五十路線を緯とする交通網が竣成の曉は實に交通の威觀を呈することなるへし。橋梁も亦道路と其の運命を一にし來りしか本縣の如き大小河川中央部を貫流し橋數約千六百四十其の延長又八里に及ぶ現況なれば交通開拓を期する上に於て其の修築改造の緊要なるは事實に照して明かなり、爲に改良計畫樹立と共に橋梁の新設架設を認め特に本縣三大橋たる玉川、由利、八龍の如きは數拾萬圓を投じて架替せらるへき機運を得るに至れり、されと一方積極的に宏大なる計畫を實現すると共に他方小破修繕の一鍬を加ふるも亦緊要の事とし昭和三年度より道路愛護獎勵をなし以て道路保持の普遍的政策を採り實行一年にして稍其の成績を挙げ居れり、尙是と同時に土木費補助規則を設け五千里に達する市町村道の改良にも一廉の盡力をなしつつあり。

第二節 治 水

本縣の主要なる河川は雄物、米代、子吉の三川とす、雄物川は源を雄勝郡東安山に發し雄勝、平鹿、仙北、河邊、南秋田の五郡を貫き役内川、皆瀬川、玉川、岩見川、旭川の支流を合せ南秋田郡土崎港に於て海に注ぐ流程約三十八里、明治三十五年平鹿郡角間川町より河口に至る間に河川法を施行し更に大正六年其の上流雄勝郡院内町に至る間に河川法を準用し昭和三年八月より同所に至る間河川法を施行す。

米代川は源を岩手縣(陸中國)二戸郡田山村根石山に發し本縣鹿角、北秋田、山本の三郡を貫き毛馬内川、阿仁川、藤琴川等の支川を合せ山本郡能代港より海に注ぐ流程約三十四里大正六年鹿角郡宮川村より河口まで河川法を準用し昭和三年八月同所より河口まで河川法を施行す。子吉川は源を鳥海山に發し鮎川、石澤川、芋川等の支流を合せ由利郡古雪港(本

莊町)に於て海に注く流程約二十一里大正六年由利郡矢嶋町より河口まで河川法を準用せり。
雄物川の支流なる岩見川の一部には大正六年河川法を施行し皆瀬、玉、旭、阿仁、役内、成瀬の六支川は同年中其の一部に對し河川法を準用したり又昭和四年五月雄物川の支流なる皆瀬川及横手川の一部並米代川の支流なる阿仁川の一部に對し河川法を施行し同年同月雄物川の上流外三十五河川の一部に對し河川法を準用せり而して以上の河川は縣費支辨河川として治水に努めつつある外縣に於て齊内川筋農業水利改良工事施行の必要に依り大正十五年七月主務省の認可を受け齊内川の一部を縣費支辨川に編入せり。
雄物川は公共の利害に重大の關係あるを以て河邊郡川添村下流土崎河口に至る延長約五里餘に對し大正六年度より同十五年度に至る十箇年間工費七百貳拾萬圓を以て國の事業として改修工事を施行せらるるに至れり、縣は此の改修費に對する分擔金百九拾貳萬貳千圓を大正六年度より同十年度に至る五箇年間に分

納し關係一市二十一箇町村よりは縣分擔金に對し拾九萬貳千圓の寄附申出ありたり、其の後物價の騰貴等の影響を受け豫算に不足を生したる爲總工費額を千七百七拾萬圓に変更せられ縣は増加工費割に對し更に大正十四年度より同二十五年年度即ち昭和十一年度に至る間に於て更に百拾貳萬五千圓の分擔を要する事となれり本工事完成の上は河邊、南秋田の二郡及秋田市に於ける洪水の害を除き得へし。

第三節 港 灣

本縣に於ける縣費負擔の港灣は船川、土崎、能代、古雪(本莊)の四港あり就中船川港は明治四十四年度以降四箇年の繼續事業として參拾六萬八千八百圓の豫算を計上し第一期工事として約六萬坪の海面の埋立及船入場一箇所の築設を起工し更に第二期工事に入り茲に總工費の半額を國庫補助に仰き十二箇年繼續事業となし總工費參百拾五萬圓を以て全工事を完成するの計畫を定め進行中の處

大正七年以降物價勞銀昇騰し材料、機械及勞務の供給困難を感じ當初の豫算に對して多大の不足を告ぐるに至れるを以て大正十年度に於て計畫を變更し總工費を四百九拾八萬圓とし爾來工事中なりしか昭和三年度を以て工事の竣功を告ぐるの豫定なるも給水設備なきを以て昭和二年度に於て豫算の範圍内に於て計畫の一部を變更し給水設備工事を施行することとなせり而して豫定第二期工事の主要施設たる繫船壁築造は即ち本港活用の基礎なるを以て設計變更認可を得既定豫算四百九拾八萬圓に右繫船壁豫算四拾六萬參千圓を増し昭和五年度を以て竣功の豫定なり。

土崎港の修築は多年の懸案にして明治四十三年十二月開催の港灣調査會に於て船川、土崎兩港を併せて一港と看做し重要港灣として指定せられ船川港は既に明治四十四年度より起工昭和五年度を以て竣工するの豫定なり、土崎港の修築は雄物川改修工事と並行實施するを有利と認め昭和二年八月臨時縣會に諮問せしに滿場一致を以て協賛可決答申を得更に同年十一月十四日土木局長内報に係

る閣議決定の年度割並修築計畫に基き總工費貳百五拾萬圓を以て五箇年繼續事業とし昭和三年度より起工の計畫を樹て昭和二年の通常縣會に附し滿場一致の議決を経たるに其の後政府財政の都合上臨時縣會に之か補助費提案なきを以て更に昭和三年四月臨時縣會を招集し年度割並支出方法を變更し昭和三年度より同八年度に至る六箇年繼續事業として之か修築工事を施行することに議決を経昭和三年六月四日内務大臣に稟請同七月二十日認可を得たり、次て昭和四年四月十九日縣參事會の議決を経起工年度を昭和四年度より同八年度に至る六箇年度に變更し國庫補助の申請を爲したるに同年九月六日附にて修築費貳百五拾萬圓の内貳百參拾七萬五千圓に對し金百拾八萬七千五百圓補助の旨内務大臣の通達を受け同時に本工事を國に於て直接施行のこととなれり其の後國庫財政の都合に依り起工年度を昭和十一年度迄繰延を爲すこととなれり昭和四年十一月十二日是に基く豫算額の内達を受けたるため昭和四年度通常縣會の議決に附し國庫納付金繼續支出計畫の變更を爲したり。

第六章 産業

第一節 農業

農事指導獎勵 本縣の耕地は約十三萬八千町歩にして農家の平均耕作段別は一町六段歩弱に當り之を東北各縣に比し一段歩多し稻田は約十萬五千町歩にして全耕地の七割三分を占め其の平年收穫高二百萬石を算す、今本縣に於ける農事必行及獎勵事項を示せば左の如し。

農事必行事項 一、排水深耕 二、堆肥の改良 三、稻乾燥法の改良 四、病害蟲の驅除豫防

農務獎勵事項 一、自家用採種圃の設置 二、鹽水選 三、稻苗育成法の改良 四、施肥法の改良 五、插秧法の改良 六、稻除草法の改良 七、耕地整理 八、改良農具の使用 九、副業の經營 一〇、畑作の改良

稻作 本縣の主要農産物は米にして水稻作十萬四千餘町歩、收穫年々二百萬

石を超過す、農家一戸當り一町三段歩餘の耕作段別を有す。

優良品種の選定 栽培法の改善に依り増産を計ると共に從來放任せる苗代跡地の利用を獎勵し稻作指導地を設置して之か普及を計りつつあり、陸稻は數年來より急激に栽培段別を増加し昭和四年の作付段別六百餘町歩に達し北秋田、山本、仙北の三郡に於ける栽培最も多し、最近五箇年に於ける米の産額を示せば左の如し

年次	水作		陸作		計		水收		陸收		計		價格
	町	反	町	反	町	反	町	反	町	反	町	反	
大正十四年	101,030.6	435.3	101,465.9	435.3	212,496.5	870.6	2,907.0	966.73	4,214.0	833.9	101,030.6	435.3	101,030.6
昭和元年	101,127.2	489.1	101,666.3	489.1	212,793.5	978.2	2,903.1	978.2	4,181.3	833.9	101,127.2	489.1	101,127.2
昭和二年	101,784.4	583.9	103,368.3	583.9	215,152.7	1,167.8	2,895.7	1,167.8	4,049.5	833.9	101,784.4	583.9	101,784.4
昭和三年	101,319.6	1,031.5	101,351.1	1,031.5	212,670.7	2,063.0	2,895.7	2,063.0	4,158.0	833.9	101,319.6	1,031.5	101,319.6
昭和四年	101,099.0	639.7	101,698.7	639.7	212,797.7	1,279.4	2,895.7	1,279.4	4,174.8	833.9	101,099.0	639.7	101,099.0
五箇年平均	101,184.2	635.9	101,500.1	635.9	212,684.3	1,279.4	2,895.7	1,279.4	4,174.8	833.9	101,184.2	635.9	101,184.2

畑作 本縣農作物の主要なるものは稻作なるか故畑作に對する觀念概して幼稚なるも近來漸く耕種改善増殖するに至れり、大豆は畑總段別三萬三千町歩中約一萬餘町歩の多きに達すと雖殆と一毛作にして其の收穫一段歩平均四斗に過ぎず又麥作は試験成績良好なるも其の栽培僅に一千百町歩にして而も作付段別年々減少する趨勢にあり、又蔬菜の如きは一般に栽培段別の増加並技術の進歩に依り相當生産を擧げつつあるも縣内の需要を充たすに足らず昭和三年に於ける主要畑作物の作付段別收穫高並價格を示せば左の如し

種別	作付段別	收穫高	價額
麥類	大	一、一五七・八	八九、六六四
	小	一〇、五七四・六	六八、五三三
豆類	大	二、四九七	一七四、五七九
	小	二、四九七	一七四、五七九

果樹 本縣の氣候は夏時暑氣熾烈にして濕氣を含むか故に果樹の生育に恰適し殊に鹿角、平鹿二郡の苹果、山本郡の洋梨好評あり、平鹿、山本、南秋田郡の和梨も亦成績を收めつつあり其の他葡萄、柿、櫻桃の栽培等一般園藝思想普及せるも數年來作付段別は減少の傾向を示す是れ主として荒廢園の整理せられたる爲にして現在に於ては栽培技術の進歩と共に經營方法を集約的に改め着々

種別	作付段別	收穫高	價額
粟	大	一、五五七・八	一一四、八三六
	小	九二一・一	五二、七四〇
蕎麥	大	一、七〇五・五	七〇三、一七八
	小	三、三三三・八	一、七九二、五八九
葡萄	大	九五六・一	五二一、一三三
	小	三、三三三・八	三三〇、三三三
茄子	大	三、三三三・八	二四八、五八〇
	小	三、三三三・八	二四八、五八〇
藍子	大	三、三三三・八	二四八、五八〇
	小	三、三三三・八	二四八、五八〇
葱類	大	三、三三三・八	二四八、五八〇
	小	三、三三三・八	二四八、五八〇

利益を収めつつあり、昭和三年に於ける樹數並生産額を示せば左の如し

種別	樹數	收穫	高	價	額
和梨	二五五、六五四 ^本		六六八、四四八 ^圓		三三五、八一 ^圓
洋梨	一四、〇五九		四五、五〇〇		二六、七二五
柿	八三、七五五		四八五、一四七		一〇八、九一八
苹果	九四、九九九		三三三、五八一		一七四、六七四
葡萄	一四八、三六〇		二九五、五五三		一五〇、〇四三
梅	五八、四一四		三、七八〇 ^石		八一、五八一
桃	六二、七七八		一三七、八九四 ^圓		六六、六〇三
櫻桃	一七、三九二		五二、一九四		五九、二七八

耕地整理及土地改良事業

一、本縣耕地及未耕地の状態

(一) 耕地 本縣耕地の總面積は十三萬八千九百五十六町九段歩(昭和三年末現在調)にして本邦屈指の農業國たり而して地味概ね肥沃にして水田は最も稻作に適せりと雖灌漑排水の組織方法甚だ不完全にして水旱の害を被ること夥しく殊に最近に於ては旱害のため年々約二千五百町歩内外の免租地を生し加ふるに四時卑濕にして冷水常に湧出し従つて收量著しく減少するもの所在其の例に乏しからず是本縣に於ける段當收量の他府縣に比し常に低減を示しつつある原因の一たるか如し又畑地に至りては其の利用程度甚だ低く従つて收穫物の價格廉ならざるか故に他府縣よりの輸入品を需用すること頗る多き狀況なり。

(二) 未耕地 本縣は未耕地の多きこと本州に於て首位を占め開墾及地目變換に依り耕地と爲し得へき總面積十萬三千四百八十町歩を有し地味亦肥沃なるを以て各種作物の栽培に適し之か開發上前途頗る有望の狀態にあり。

二、事業の現況並趨勢

(一) 耕地整理 本縣耕地の狀態は前記の如く概して耕作上不良なるか爲之を救済改良するの目的を以て明治三十四年以降耕地整理の實施普及を獎勵し今日に至る迄整理施行の認可を與へたる地區總數四百十三箇所此の總面積三萬四千二百二町步(昭和五年四月末現在)を算せり而して整理後耕作の便宜は勿論收量の増加と共に品質の向上著大なるを以て逐年施行出願者著しく増加し現在に於ては到底出願者の希望を充たし能はざるか如き盛況にあり、今其の事業進捗程度を表示すれば左の如し

(昭和五年四月末調)

種別	地區數	段別	種別	地區數	段別
工事ノ完了届出ノモノ	三三	一九、九七三・九	登記完了シタルモノ	一六九	一六、五八〇・四
換地處分ヲ了セルモノ	三三	一八、八五二・二	事業終了ノモノ	一一三	一一、三〇九・九
地價配賦ヲ了セルモノ	一五	一五、八九九・九	工事中又ハ着手準備中ノモノ	一八〇	一四、三三〇・一

(二) 開墾 本縣に於ける開墾助成認可地區總數九十個所此の總面積二千八百八十七町三段步にして内工事完了地區十八個所此の面積二百町二段步なり之を本縣の開墾見込地面積十萬三千四百八十町步に比すれば僅かに其の一小部分に過ぎず而して如斯本事業の進捗せざるは一に資金關係と用水設備の困難なるに起因すと雖近來機械揚水の方法等發達し來りたるを以て逐年本事業の出願者著しく増加の趨勢なり、更に八郎湖干拓見込地一萬二千町步其の他の國營開墾の實現に伴ひ今後國の施設と相俟つて一般的開墾の獎勵施設を懈らざるに於ては本縣は實に無限の寶庫を有せるものといふも敢て誣言にあらずと認む。

三、事業に對する施設並豫算

(一) 現在の設備 以上の事業獎勵に對する施設計畫を設計調査、水利調査、溜池調査指導、揚水機調査指導、確定調査、工事監督、事務指導、事務指導助成農業水利改良調査の九種とし之に従事する職員定數百五人を設備し總經費豫算拾壹萬六千拾八圓(昭和五年度)を計上せり、今本事業の獎勵施設概要を説明す

れは左の如し

設計調査 當業者の最も困難を感ずる事項は適當なる設計書の製作にあり故に縣は當業者の申請に依り職員を派遣し測量設計を爲し事業實施の設計書を作製し之を交付す現在に於ては技術員二名を一組として十六組を配置し一組の工期を百八十町歩とし一箇年二千八百八十町歩施行の豫定なり。

水利調査 本調査は農業水利に関する事業又は之に伴ふ設備若は工作物等に付必要な調査をなすものにして縣は自發的に施行するを本體とするも關係土地所有者又は公共團體の申請に基き之を施行することあり、現在に於ては技術員二名を一組とし四組を配置し一組の工期四百町歩つつの見込を以て一箇年千六百町歩施行の豫定なり。

溜池調査指導 本調査は既に存在する溜池の現在を調査し其の管理に付き指導を爲すを目的とし或は縣に於て自動的に又は當業者の申請に基き之か指導の任に當るものにして現在に於ては技術員二名を一組として二組を配置し一組の功

程三百六十町歩の見込を以て一箇年七百二十町歩施行の豫定なり。

揚水機調査指導 本調査は水利の困難を緩和する爲機械揚水に関する施設の指導を目的とし當業者の申請に基き其の設備は勿論揚水方法其の他調査指導を爲すものとし、現在に於ては之か技術員三名を配置し昭和五年度は六百七十二町歩施行の豫定なり。

工事監督 本監督は設計調査、土地利用調査、溜池調査、揚水機の調査、水利調査等に基き工事施行の順序方法を指揮監督するものにして當業者の申請に基き之を行ふものとし而して現在之に要する技術員二十名を設置し一名に付き六十五町歩つつの見込を以て一箇年千三百町歩施行の豫定なり。

確定調査及設計變更 本調査は整理後の土地確定に関する各筆の調査字區域變更國有地其の他に關する圖書を調製交付するものにして施行者の申請に依り之を行ふ、而して概ね出來形に因る設計變更を伴ふを以て同時に其の調査を併行するを常とす現在之か技術員二名を一組として七組を配置し一組三百六十町歩

つこの功程に依り一箇年二千五百二十町歩施行の豫定なり。
事務指導 本指導は本事業に關し規定に依る總ての必要なる手續を指導するものにして施行者の出願又は當廳に於て必要と認むる場合に之を行ふ而して現在に於ては技術員二名、事務員八名を配置し一名四百町歩宛の功程を以て一箇年四千町歩施行の豫定なり。

事務指導助成 本縣に於ける整理完了後の事務頗る遲滯し之を施行者に一任するに於ては斯業の發展を著しく阻害するものあるを認め大正九年度以降施行者より經費の寄附を條件とし之か指導助成員を常設し工事完了すれば直に換地處分其の他の跡仕末の事務を進捗せしむ而して現在之か一名一箇年の功程百五十町歩宛とし六名を配置し一箇年九百町歩施行の豫定なり。

農業水利調査 耕地の改良に付き農業水利の組織を改善すること極めて肝要なるを認め補助金を交付することとなしたれとも尙一層の完備を期するため縣下全般に亘り根本的の調査を爲す目的を以て昭和三年度より調査班一班を設け該

年度に於ては仙北郡鞠子川筋沿岸の被害地約二千七百町歩、昭和四年度に於ては南秋田郡新城川沿岸約千五百町歩の調査を了し昭和五年度に於ては北秋田郡長木川沿岸千二十町歩調査の豫定にて更に逐年増加の見込なり。

(二) 諸機械器具の貸與 耕地整理及開墾事業獎勵の爲開墾用「トラクター」拔根機、土締機等を設備し之を貸與し且之か操縦指導に要する職員を設置の上出願者に多大の便益を與へつつあり。

(三) 移住家屋建築補助 開墾地移住者獎勵の爲助成法に依り事業を施行する地區に建築したる移住者に對し家屋一戸當建築費千圓以上のもは四百圓以内、共同建造物にありては一棟當建築費千五百圓以上のものに對し其の四割の補助金を交付し尙事業施行者か之を建築したる場合は移住者に對し其の建造物及宅地又は耕地の一部を讓與し若は永小作權又は地上權設定等の場合に之を補助することとし小作人保護獎勵をも併せ施行しつつあり。

(四) 用排水路幹線改良事業

(1) 齋内川筋農業水利改良事業 本事業は縣南仙北郡の平野を貫流する齋内川の改良事業にして従來長野町外四箇町村の耕地は年々水害甚しきため去る大正十四年以來五箇年の繼續事業として之に着手し經費豫算四拾貳萬圓を以て着手昭和五年三月事業完了を見るに至れり従つて之か關係區域千三百町歩の除害と共に其の收量増加の著しきものあるへし。

(2) 平鹿堰用水改良事業 本事業は縣南平鹿郡十文字町外六箇町村の耕地千三百四町歩に對する灌漑用水の補充を圖るものにして大正十五年より四箇年繼續事業として經費四拾五萬圓を以て工事に着手し爾來工事施行中なりしか意外の難工事に逢着し工事の進捗に蹉跌を來たしたために工事費參萬五千圓を増加し工事期間一箇年延長の已むなきに至れり、同地方は従來年々旱魃の害を被り従つて收穫量を減しつゝありしか追而本事業完成の時期に至れば灌漑用水の緩和に伴ひ著しく其の收量の増加を見るを得へし。

(3) 玉川用水改良事業 本事業の目的は玉川の有害成分を緩和し酸度を低下

せしめ以て用水の改良を圖らんとするものにして之か完成の曉には關係十二箇町村面積約二千四百五十町歩の米産額増收のみにて年々其の總額約貳拾五萬圓に上る見込を以て主務省の指令を得次第本年度より着手の豫定なり。

(4) 七瀬用水改良事業 本事業は昭和三年度の調査に係り關係町村七、總面積約二千七百町歩に亘り仙北郡鞠子川沿岸に於て年々灌漑時期に際し用水の涸渴を救はんとす事業完成の上は米の増收利益年に約拾八萬圓に上る見込にて昭和四年度より四箇年の繼續事業として之か事業の一部に着手するに至れり

(五) 用排水改良工事費補助 本縣米産は年總額常に二百萬石内外を往來すと雖耕地の擴張を怠らざると共に銳意既耕地の改良に力を注ぐに於ては優に其の數割の増收を得ること容易なるを認め國庫補助を受くること可能なる用排水幹線改良事業に付ては前記二箇所に於て夙に之を縣營とし施行中にて尙計畫中に屬するものありと雖國庫補助の恩典は目下の所支配面積五百町歩以上のもののみなるの結果之か恩典を受くること能はざるの個所頗る多く而も急速之か解決を

爲すに依り利益の著大なるものに付其の改良の容易迅速を圖るか爲に昭和三年度より新に工事費の三割以内の縣費補助を交付することとせる結果此種事業の勃興を見るに至れり。

農事試験場 明治二十九年の創立にして本縣重要農産物たる米、大豆、果樹、蔬菜の育成栽培、病菌害虫の驅除豫防或は改良農具に付試験研究を行ひ講習講話等をなす又大正十二年より實業補習學校教員養成所を併置せり、尙昭和四年より農林省指定陸稻試験地を大館町に設置し陸稻各種の試験を行ひつつあり、現在試験に供用せるは田四町歩餘、畑六町六段歩餘にして事業の主なるもの左の如し

- 一、米、麥、菽類、果樹、蔬菜の各種試験
- 二、重要作物の純系分離及交配
- 三、米、菽類原種の育成配付
- 四、改良農具の試験並獎勵

- 五、動力農具の貸與
 - 六、新舊苗代比較試験
 - 七、稻の直播及畜力除草試験
 - 八、稻熱病其の他一般病菌害虫の防除調査試験
 - 九、特殊蔬菜採種試験
 - 一〇、施肥標準調査
 - 一一、各種肥料試験
 - 一二、野鼠チブス菌の配付
 - 一三、土壤肥料其の他の鑑定分析
 - 一四、綠肥作物栽培試験
 - 一五、講習講話並實地指導
- 穀物検査 明治三十九年輸出米検査規則の實施前に於ける本縣産米は品質粗悪にして市場の廉價揚らす需要地も單に北海道に過ぎざるの状態なりしか優良品

種の普及、栽培方法の改善と相俟つて該規則の實施以來漸次市場の聲價を高め其の販路亦東京、北海道、樺太、神奈川、山梨、埼玉其他十數府縣の廣きに至れり、更に本縣産米の根本的改良を爲すには生産米の検査をも施行するの必要を感じ明治四十三年米穀検査規則を制定し同年秋季より之か検査を併施したり、穀物検査所は本所を縣廳内に置き之に七箇所の検査支所、三十二箇所の輸出米検査所及二百二十六箇所の生産米検査所を分屬せしめ吏員二百數十名を配置して検査事務に従事せしむ而して昭和四年度に於ける生産米検査数は三百五十三萬八千三百三十二俵即ち四百四十一萬五千三百三十二石にして輸出米検査数は二百六十萬八千九俵即ち百四萬三千二百四十三石の多きに達せり。

薬工品検査 本縣の薬工品の主要なるものは繩類、實子繩、實子網、苳、草鞋等にして之か販路は北海道を主とし外二十府縣の多きに涉れり、昭和三年度中に於ける輸出總額約六拾萬貳百六拾參圓にして逐年増加の趨勢にあり、明治四十四年以來輸出薬工品の検査を實施して製品の統一を計りつつあり、今昭和三

年度検査數量を掲ぐれば左の如し

種別	數量	價	額
草履	七〇六		二、九四〇
草鞋	三、七九六		一四、四七三
實子繩	五、三三三		一一、〇一八
實子網	四、一〇二		六五、〇八三
苳	一六、〇九一		五七、六二六
苳	八四、〇二四		一九八、四四九
其他ノ移出承認品	三七、九四一		一四九、六八四
計	一五三、〇七九		六〇〇、二六三

縣農會 本縣農會の昭和五年度經費豫算は八萬參千九百六拾八圓にして縣の機

關と互に連絡を計り直接農事指導獎勵を爲しつつあり、縣は同會事業費に對して四萬七百圓を補助す其の重なる事業左の如し

- 一、普通農事の獎勵
- 二、採種圃の設置獎勵
- 三、配給改善並共同販賣施設の獎勵
- 四、農事調査
- 五、講習講話の開催
- 六、會報の發刊
- 七、種苗交換會の開催
- 八、農事研究會の開催
- 九、市町村農會の經營指導
- 一〇、農家經濟調査
- 一一、農業經營改善指導

- 一二、副業獎勵
- 一三、宣傳
- 一四、郡市町村農會役員表彰
- 一五、町村農會長協議會
- 一六、町村農會技術員設置獎勵
- 一七、郡農會職員設置獎勵

第二節 蠶 絲 業

桑園 本縣桑園段別は五千八百八十四町七段歩にして耕地面積の四分に當れり而して植付品種中最も多きは赤木の四割八分、地桑の一割四分、軸振の六分五厘等順次に亞き其の他嶋の内、矢留、改良風返、魯桑實生、五郎船早生、惣勤早生、赤市平、改良高富、秋田等二十餘種に及へり又杜立方は高刈最も多くして約半に近く根刈、立通は何れも二割三分強にして中刈は最も少し今や懸

は栽桑専務技術者の常置並指導桑園の設置を爲すの外桑園改設増設獎勵規程及稚蠶共同桑園設置獎勵規程を設け荒廢桑園の改植、桑園の新設並稚蠶共同桑園の設置特に夏秋蠶専用桑園の増設に對し獎勵を加へつつあるを以て將來之か改良増設見るべきものあらむ、尙北秋田郡大館町に設置の縣試驗桑園に於ては地方特有の桑樹「どむれ病」其の他に關する諸般の調査研究を行ふの外別に桑苗圃を設けて苗木の育成を爲し之を縣の獎勵規程に基き配付を爲しつつあり。

養蠶 本縣養蠶戸數は一萬四千七百九十二戸にして其の掃立枚數は春蠶三萬一千四百十六枚、夏秋蠶二萬五千八百五十九枚、合計五萬七千二百七十五枚なり而して之か收繭額は春蠶十八萬八千八百九十七貫、夏秋蠶十三萬四千八百六十七貫、合計三十三萬三千七百六十四貫にして此の總價額貳百拾壹萬九千百參拾貳圓に達せり而して尙土地勢力、氣候等に鑑み將來發達の餘地多きを認むるを以て縣は技術者を設置するの外養蠶獎勵規程を發布し市町村又は市町村農會其の他の團體に於て蠶業技術員を常設し又は期節養蠶教師を設置する場合指定

の共同事業必行を條件とし其の技術員を派遣すると共に兩者に對し獎勵金を交付しつつあり、現に派遣せる常設蠶業技術員七十九名にして期節養蠶教師四十七名に及へり縣は右の如く一面繭産額の増收に對する施設獎勵を爲すと共に之か販賣消化の方途につき各般の施設を行ひ現在に於ては主として繭賣買上各種の弊害を未然に防止し且取引の公正を期する爲繭の共同販賣場たる市場の設置を獎勵しつつあり而して現に市場に於て取引するもの全産繭額の五割に達し個人取引に比し其の成績頗る見るべきものあり而して是等市場の經營主體は養蠶同業組合、産業組合、株式會社等なりとす。

製絲 由來本縣の生産繭は品質良好なるも其の消化機關に乏しく爲に之か販賣上圓滑を缺きたるを以て一面産額の増加を圖ると共に他面之か消化機關の設置を慫慂せり即ち雄勝郡湯澤町に設置しある縣是秋田製絲株式會社は右に基き設立せられたるものにして蠶種、養蠶、製絲の三業者を基礎とし更に有志を加へたるものなり今や支店を北秋田郡十二所町、山形縣西置賜郡荒砥町並同縣西

村山郡左澤町に設け其の釜數四百五十四に上り優良生絲の生産に努めつつあり
而して縣内生絲産額は前記會社に於て生産せるものの外器械製絲一及座繰製絲
により生産せるものあるを以て其の産額を合算すれば一萬二千四百二十一貫と
なり其の價格八拾九萬七千八百九拾壹圓に達せり。

蠶業取締所 蠶業取締所は元縣廳構内にありしも大正十二年雄勝郡湯澤町に之
が建物を新築し大正十三年四月移轉せり而して其の出張所は縣廳内に常設し
更に必要に應じ縣下極要の地に臨時出張所を開設す同所は蠶業取締事務執行機
關なるは勿論なるも更に積極的に蠶種製造の指導獎勵に努めたる結果逐年優良
なる成績を挙げ蠶品種の統一せること殆ど全國に類例なく又普通蠶種検査の如
き其の合格率常に九割八分強にあり而して蠶種製造額は春蠶百萬二千五百十九
蛾、夏秋蠶八十八萬七千四百一十一蛾、合計百八十八萬九千九百三十蛾なり。
蠶業試験場 大正六年雄勝郡湯澤町に地をトして原蠶種製造所を設け蠶品種の
改善と統一を圖らんか爲専ら原蠶種の製造配付を行ひ傍蠶桑に關する試験、調

査、講習、講話並實地指導の任に膺れり、大正十一年四月農商務省令に依り蠶
業試験場と改稱し其の事業を續行し今日に至れり今同場に於ける原蠶種の配付
數を示せば春蠶種一萬千二百蛾、夏秋蠶種一萬二千四百四十蛾、合計二萬一千四百
四十蛾なり。

蠶事講習所 蠶業に關する人材を養成する目的を以て大正九年縣立農事講習所
を雄勝郡湯澤町なる蠶業試験場隣接地に設け年々生徒二十名を募集し二箇年に
亘り蠶業に關する學理及實地を修得せしめつつあり而して現在卒業せる者百八
十七名を數ふる至り縣蠶絲業の爲活躍しつつあり。

蠶絲業に關する團體 郡を區域とする團體は各郡に養蠶同業組合あり又縣を區
域とする團體としては大日本蠶絲會秋田支會、秋田縣蠶種同業組合及秋田縣養
蠶同業組合聯合會等あり之等團體は何れも本縣蠶絲業の改良發達に力を注ぎつ
つあり。

第三節 畜 産

産 馬 本縣の馬匹飼育戸數四萬六千三百戸、馬匹總數五萬九千頭にして年々約五千五百頭を生産す管内到る處馬産の適地にして古來駿逸を出し畜産業の主位を占む、農家副業として傳統的發達を遂げ農民と馬匹との關係極めて密にして永く離るへからざる關係を保有す、本縣は曩に地況竝農家の状態を考查し且在來種の骨格に鑑み鞍馬生産方針を樹立し供用種牡馬を「ハクニー」「アングロノルマン」「ベルシユロン」の三種に求め銳意之か産馬の改善を圖りたる結果産馬の聲價愈揚り軍馬補充部を始とし山形、茨城、新潟、長野、栃木、千葉、富山等の各方面より歡迎せられ其の需要年々増加し殊に軍馬購買は明治十二年以來繼續する所なり、現在管内に於ける供用種牡馬は國有七十頭、縣有三十頭、畜産組合有百四十餘頭にして縣は國の施設と相俟ち時代の要求に副はんか爲明治三十二年以來毎年外國種牡馬輸入を續け現今「サラブレッド」種二頭、「ハクニー」種

三頭、「アングロノルマン」種十二頭、「ベルシユロン」種一頭を繁養せり又大正九年種畜場を河邊郡豊嶋村に設置し候補種牡牛馬の預托育成種付並飼料耕作試驗其の他畜産の指導獎勵を爲し以て斯業改善に資しつつあり、斯の如く縣民一致産馬改良に努めし結果近時産駒の體型統一せられ所謂秋田鞍馬作出の緒に着けりと雖唯憾らくは急激なる外國種馬血液注入の爲此處に地方風土に順化適應せざるものあるを見るに至れり、從つて抵抗力薄弱にして諸種の疾病及蕃殖機能障害に依る生産率遞減を生ずるに至れるは獨り本縣のみならず今や全國的缺陷として産馬上看過すべからざる問題なりとす縣は之か對策として極力馬匹衛生状態の改善を圖り生産に使役に遺憾なからしめむことを期せり即ち大正十四年以來骨軟症豫防試驗地を數箇所を設定し其の効果顯著なるを認めたり昭和二年度より更に農林省の補助を仰き五箇所伝染性貧血豫防組合を設置し更に昭和三年三月馬の傳染性貧血豫防規則と其の施設補助規程を制定し益々之か制遏に努め漸次普及該病の絶滅を期せん

牧野に關しては大正五年以來國有林馬産供用限定に就ては極力管林局に交渉し殆ど豫期の目的を達成し現在限定面積放牧地四千五十餘町歩、採草地六千三百餘町歩、計一萬三百五十餘町歩を供用し得るに至れり又民有地にして牧野に供用せられ或は其の見込あるもの約四萬五千町歩を有すれども管轄區分未解決のため放任荒廢に屬するもの尠しとせず大正十三年以降農林省及帝國競馬協會の補助を得隔障物築造或は其の整理したる面積七千餘町歩に達せり尙今後整理維持に關しては鋭意普及獎勵に努めんとす。

畜産組合は秋田縣一圓を區域として種畜の供給及種付、家畜市場の開設、牛馬衛生の改善、品評會、共進會及講習、講習並競馬會等の開催を行ひ本縣畜産業の發達に貢獻しつつあり。

鹿 牛 本縣に於ける乳牛の主なる産地は南秋田郡及河邊郡にして其の他の地方は牧野利用關係に據り役肉用牛を生産し鹿角郡最も多く何れも農家の副業として經營す然るに國有林野の放牧を禁止せられたると明治四十三年以來價格低

落せる爲一時斯業に一頓挫を來し飼育戸數甚しく減少せしも大正九年以降漸次恢復を見現在飼育戸數二千四百餘戸、總數四千百餘頭を算するに至れり。三 縣は明治四十二年來年々「ホルスタイン」種の種牡牛を購入し之を畜産組合員及個人に貸付し専ら乳用牛の蕃殖を獎勵すると共に餘乳利用の途を啓發せんか爲畜産組合に對し大正十五年より乳牛四頭を貸與し且年々多額の補助金を交付して酪農事業の助成を圖りし結果營業者に刺激を與へ著しく斯業振展の趨勢を示しつつあり「ショートホーン」種は主として縣南並縣北の山地に供用せしめ今や役肉用種として世に聲價を博しつつあり。

第四節 林 業

本縣林野の見込面積は實に八十九萬餘町歩にして縣全面積の約七割強を占む内國有に屬するもの約四十萬町歩、公有に屬するもの二十六萬六千餘町歩其の他二十二萬七千餘町歩は私有並社寺有たり而して國有の多くは鬱蒼たる立木地に

して其の蓄積一億六千萬石に及び夙に彼の日本三大美林の一として世人に推稱せらるる秋田杉は皆此の國有林に在り民有林に在りては明治維新以來林政の弛緩に伴ひ濫伐暴採至らざるなく鬱蒼たりし森林も其の影を没し漸次荒廢の状態に至らんとするは唯に國富の資源上憂慮すへき問題たるのみならず國土の保安上及治水上危害の原因を爲すもの少しとせず依りて縣は政府の方針に従ひ又以て縣下の情勢に鑑み施設せる事項左の如し

模範林 本縣模範林は明治三十五年の創始に係り合理的造林の模範を示し愛林思想を涵養すると共に公共團體の基本財産造成を目的とし其の用地は専ら國有林の拂下に仰ぎ毎年二百五十町歩宛を植栽し二十箇年にして五千町歩の造林を完成し植栽地の保護手入は之を地元町村に負擔せしめ其の伐採收入を分收せむとするにありしも中途にして其の用地は公有林野に地上權を設定經營するに至れり而して明治四十四年迄に設置せられたるもの三十三箇所其の面積三千三百町歩に達したるか一面民間に於ける造林事業は逐年増加せると又一方に於て公

有林野整理開發の急務は之か調査機關増設の必要あるを認め大正二年其の計畫を變更し全面積を二千五百三町歩に縮少し内四百四十町歩の造林不適地を除きたる部分に於ける未植地八百四十町歩に對しては年々五十町歩つつ造林し昭和五年度に完成の計畫に更め目下之か實行中に屬し昭和五年度に於て十町歩の新植を以て完了を告げむとす。

縣行造林 公有林野の利用を促進せしむると共に縣並町村の基本財産を造成する目的を以て昭和二年度より向ふ三十箇年間に縣下公有林野七千町歩に地上權を設定し收益分收の契約に依り當初三箇年間は各百町歩、八年間は各二百町歩十二年間は各二百五十町歩、七年間は各三百町歩、全經費貳百拾九萬拾六圓の豫定を以て杉及赤松の造林事業を行はんとす而して昭和四年度迄に實行せる新植面積は三百十町餘歩とす。

公有林野の整理 本縣に於ける公有林野の見込面積二十六萬六千餘町歩の内從來町村有たりしもの二萬九千餘町歩其の他の二十三萬七千餘町歩は部落有にし

て多くは荒廢せる原野状態をなせること前述の如し縣に於ては之か開發の手段として先づ部落有林野を町村に統一せしめ次で其の利用方法を確立し林業用地に對しては更に一定の計畫を樹立し從來放棄して顧るものなかりし天然資源の開發に努めつつあり、而して明治三十九年以來部落有林野統一を爲せるもの昭和四年度末十八萬八千六百八十四町歩、利用方法を確定せるもの昭和四年度末十七萬六千五百四十二町歩に達し其の殘部に對しては數年を出すして整理完成の豫定を以て之か獎勵中にあり。

公有林野造林補助 公有林野の開發及町村基本財産の造成を目的とし公有林野の造林に對し明治二十九年以來補助金を交付し來りしか大正八年度より更に部落有林野統一並入會整理に對し新に補助の途を開くと共に從來の補助率を高め又大正十三年 聖上陛下御慶事に際會するや之か記念事業として大正十三年度より十箇年間に六千町歩の人工造林を完成せしむる計畫を樹て益々之か整理開發に努め昭和四年度末迄造林防火線部落有林野統一及入會整理補助額四拾四萬

參千餘圓に達せり而して昭和五年度に於ては參萬五千九百五拾六圓を支出の見込を以て極力獎勵中なり。

林野改良造成補助 本縣公有林野二十六萬六千餘町歩に對し管理區分の想定を爲せるに將來採草地其の他原野として經營すべき面積十三萬一千餘町歩を算す然るに其の大半は小柴荆棘蔓生して草生の量極めて少なきを以て之か改良を計り增收を策するは農村振興上裨益する所甚大なり又營林地十三萬二千餘町歩中其の半は荒廢に傾き林相の改善を要する現況にありて之か改良を急務とす而して其の助成を圖るかため昭和二年度より二十箇年の豫定を以て原野九萬四千餘町歩、雜木林六萬四千町歩、計十五萬八千餘町歩の改良造成事業獎勵計畫を樹て昭和四年度迄に於て補助金參萬六千四百餘圓を交付し昭和五年度に於ては壹萬四千貳百餘圓を計上し二千五百町歩の改良整理を計り漸次完成に進まんとす

樹苗養成補助 民有林野の造林獎勵と共に一面健全なる苗木を供給せしめんか爲明治四十年より樹苗圃補助金下付規則を設け郡、市、町村農會にして樹苗

圃を設置するものに對し縣費補助金を交付せり然るに造林事業は逐年發展し之に伴ひ苗木の需要益々増加し全國的に拂底を來す狀況なるを以て政府は大正八年度より新に府縣並公私苗木養成者に對し補助金交付の途を拓けり依つて縣は從來の補助規則を廢止し更に樹苗養成補助規則を制定し公有、社寺有、私有林野の造林用樹苗を養成するものに對し補助金を交付して益々之か獎勵を圖り其の需給關係の圓滑を期しつつあり昭和四年度迄の補助金額拾萬四千餘圓に及へり荒廢地復舊補助 明治四十四年度に於て先づ雄物川流域の荒廢地に付調査を初め大正元年度より之か復舊事業の補助實行に着手し漸次縣内各地の重要なるものに及ぼし來れる處なるか其の補助金を交付せるもの昭和四年度迄に入萬七千貳百參圓餘に及へり尙將來調査の進捗と共に相當設備を施行せしめ以て治水上遺憾なからむことを期せり。

民有林造林補助 森林の治水的關係に就ては從來殆んど閑却せられ漸次危殆に瀕するものあるを以て政府は昭和二年度より二十一箇年繼續費として約六百萬

圓を計上し水源涵養に關係ある私有及社寺有地の造林を獎勵するため之か助成の途を開けり依つて縣に於ても私有林野並社寺有林野二十二萬七千餘町歩の内水源涵養上重要な關係を有する要造林地面積一萬三千二百二十六町歩に對し政府の趣旨に則り之か造林を完成せしめんとし昭和二年度に於ては差當り二百六十町歩補助金九千七百四拾貳圓を計上し爾來昭和三、四兩年度に於ては四萬參千貳百四圓を以て千三百四十三町歩の造林を計れり而して昭和四年十月政府の補助規則に改廢を見たるを以て政府の方針に基き縣は昭和五年一月從來の水源涵養造林補助規程を廢止し更に民有林造林補助規程を公布して漸次該計畫の進捗を期しつつあり。

木炭検査 本縣木炭は其の年産額千七百萬貫此の價格參百餘萬圓の多きに上り其の大半は縣外に移出せらるる狀況にして縣下産業中重要なるものの一たるを以て益々之か品質の改善を計り聲價の向上を策し斯業の隆盛を期せしむるは本縣産業上極めて緊要なる事項たり、故に縣は之か對策として昭和四年度より木

炭の縣營検査を實施し本廳内に木炭検査所を置き之か事務を掌るの外縣内樞要の地を撰み支所三箇所、出張所七十二箇所を設け爾來嚴正なる検査を勵行して品質の統一改善を促進せしむると共に指導改良の技術者を置き優良なる技術の普及に専念しつつあり。

木炭倉庫建設補助 本縣木炭は前述の如く縣下産業の重要なものの一なり之か品値改善の策として木炭倉庫建設の急務なるを認め之か建設費に對し補助金交付の途を拓けり而して大正十四年以來補助したるもの十七棟八千六百參拾四圓に達す。

林業技術員設置補助 町村林業技術員の設置は現下の急務にして之か設置獎勵の爲昭和二年度より補助金交付の途を開きたるか之により昭和三年度に於ける設置數十八名に達せり。

保安林開墾制限禁止施設 治水上重要な箇所施設の施業を確保すべく明治九年官有林より初め同十五年民有林にも之か制度を及ぼすに至り本縣に於ても明治四

十四年度より保安林開墾制限禁止に關する調査を開始し爾來森林法の制定改正に伴ひ之か改善を計り國土保安上の完備を期し現今に及へり今之か近年の狀勢を見るに保安林として取扱つあるもの二千八十二箇所、面積五萬七千四百三十一町六段歩内國有九十一箇所四萬四千七百五町一段歩、民有一千九百九十一箇所一萬二千七百二十六町五段歩、開墾制限地七百九十九件面積三萬二千二百八十一町歩、同禁止地五十件八町八段歩にして治水保安上適切なる施設を圖りつつあり。

特殊樹種の植樹 縣内に於ける工藝用材の繁殖を計らむか爲明治四十年以來苗圃を設置し漆及白楊樹の苗木を養成すると共に一方に於ては他の特種苗木を購入し以て公共團體又は施行確實なる私人に對し之か無償交付をなせり其の數大正十三年迄百五萬八千本に達せり、其の後交付を中止し専ら保護手入に關し指導を爲しつつありしか昭和四年度より更に國產漆獎勵の目的を以て苗木の養成を開始し適地を撰みて漆栽培組合の設立勸奨を爲しつつあり。

私有林指導 現今私有林野の經營狀況を觀るに其の施業方法漸次改善せられつつありと雖未だ適當なる指導機關に乏しく僅に從來山林會に於て個々の私有林野につき指導の途を講しつあるに止り遺憾とする所少なからざるを以て縣に於ては昭和元年度より新に私有林の指導技術員を特設し山林會と相呼應して之か指導開發に努めつつあり。

林業試験 地方的に林業試験をなし施業の基礎を明確ならしむることは斯業の發達上必要の事項に屬するを以て大正九年採草地の合理的整理方法を企圖し現に繼續試験中に在り、尙昭和四年更に進んで本縣植物調査、芝の絶滅法、檜播種造林法、復層林並混播林造成法及薪炭林の擇伐法等の調査試験を計畫し林野施業の基礎を確立せんとす。

森林組合 森林の經營を有利ならしむる爲森林組合の設立を奨励せる結果現在施業組合一、保護組合三の設立を見るに至れるか各種森林組合は小林業者の施設經營上最も利便多き組織たるに依り益々督勵以て設立を促しつあり。

第五節 水産業

五十七里の海岸線と寒暖二流の海流を有し河川に雄物、米代、子吉、湖沼に八郎、十和田、田澤等を有する本縣の水産業は天與の惠澤に浴すること尠なしとせず、海上は夏秋の二季靜穩にして冬季に入れば西風強烈を極め白浪泡沫を飛ばし怒濤海岸に咆哮するか爲海面漁業の最盛期は夏秋の兩季に限られ冬季は殆んど休業の状態にあり、暖流は對馬海峽より佐渡近海を経て北流し寒流は遠く「オホツク」海より北海道の西部を洗ひ來りて本縣の沿海に達す、水深は一帶に遠淺にて由利、河邊、山本の沿海は七、八哩の沖合に出るも尙三、四十尋内外に過ぎず、唯男鹿半嶋の附近は著しく深度を加へ沿岸と雖十五、六尋に及び諸所暗礁の屹立を見る、水産物の主なるものは海面に於ては鯷を主とし鯖、鯛、鱈、鱈、鮫、鯉、鮒、鰯等にして介藻類亦相當の漁獲あり、河川、湖沼にありては鮭を主とし鱈、鯉、鮒、鰯、白魚、公魚、八ツ目鰻、鮎、鰻等を産す然れども

海岸線の長きに比し年産額少きを遺憾とす、大正十四年以後に於ける産額を示せば左の如し

年	漁獲高	養殖高	製造高
大正十四年	二、〇二六、三三五	一六八、三七九	四九五、六七四
昭和元年	一、六二七、二二六	一四九、〇七六	四〇八、二五〇
昭和二年	二、〇一九、六五五	二一九、三〇五	三七九、六九八
昭和三年	一、七七七、四七三	一一一、三五七	五八〇、八〇〇
昭和四年	一、七七七、六三七	一二五、七三五	四七五、九四七

水産試験場 明治三十三年南秋田郡土崎港町に設置し漁撈、製造、養殖の各種試験並調査を施行し一面講習講話に依り水産業の改善指導奨励に努め且つ漁船漁具の設計に應じ斯業の發達に努めつつあり、主なる事業左の如し

漁撈 鮪立場釣漁業試験、鮪延繩漁業試験、鯖流網漁業試験、鯖釣漁業試

験、鰯刺網漁業試験、つわい蟹罾場蝦調査並漁業試験、海洋觀測、底質調査、漁況通信

製造 大羽鰯、鯖鮫利用試験、蛸、小魚利用試験、煮乾及素乾品の貯藏試験

養殖 養鯉試験並鯉苗配給、温水性魚族飼育試験、鮭鱒増殖事業、公魚小鮎移殖試験、淺海利用試験、淺海利用適地調査、河川湖沼養殖適地調査、講習講話

漁業取締

漁船 沖台漁業の啓發上漁船改良の急務なるを認め明治四十四年以來奨励金を交付し漁船の改良を奨励し來りたるか大正十四年以降専ら動力附漁船の建造に力を致したる結果急激に増加を來せり、昭和四年末現在の漁船數を示せば左の如し

動力を有せざる漁船 二、五一八隻

動力を有する漁船 一、五二二隻

水産會 秋田縣水産會は大正十一年に山本、南秋田及由利の三郡水産會を會員として設立したるものにして水産製品の検査、製造の實地指導、販賣の斡旋、魚介の蕃殖保護、講習講話會、水産に關する諸調査等の事業を施行し斯業の改良發達に貢獻しつつあり又郡水産會は大正十一年の設立に係り斯業の實地指導を主とし魚介の蕃殖保護、講習講話會等の事業を施行し昭和二年度よりは縣に於て補助金を交付して各郡一名宛の専任技術員を設置せしめ指導獎勵上遺憾なきを期せしむることとせり。

漁業組合 本縣に於ける漁業組合は六十組合にして沿海並八郎湖岸の漁村には普く設立され組合員總數六千五百五十二人昭和五年度經費豫算總額は貳拾四萬七千餘圓に達す組合に於ける共同施設事業は近年頗る勃興しその成績見るべきもの尠からず其の主なるものは共同販賣を爲すもの四組合、共同購買六組合、船溜場の修築四組合、資金貸付九組合、共同製造三組合、養殖施設十四組合等にて尙續出するの機運にあり、而して漁村の現況に鑑み漁業組合の活動を促進する

の急務なるを認め縣に於ては益々組合の堅實なる發達を爲さしむべく指導監督に努めつつあり。

第六節 商 工 業

秋田縣物産館 本館は明治二十九年秋田縣物産陳列所と稱し縣廳構内に（總坪數百二十四坪九合三勺木造中央一室二階其他平家）設立せられたるに始まり爾來専ら優秀なる他府縣の物産を購入し當業者の参考に供し傍ら本縣製產品の委託販賣をなし之か紹介に努め來りしか大正十年農商務省令に基き秋田縣商品陳列所と改稱し各種の調査、商品の取引紹介、陳列裝飾の研究其の他各種展覽會、競技會及講習講話會等を開催し本縣物産の改良販路の開拓に努め以て縣産業の發達に貢獻したり 先帝陛下東宮に在らせられし時御結婚の大禮を挙げさせ給へるを奉祝する記念事業の再興に方り記念物産館を建設し以て百萬縣民の赤誠を披瀝すべく地を秋田市土手長町中町に相し大正十三年工を起し大正十四年十

月工事竣成を告ぐるや畏くも 今上陛下東宮にあらせらるる時本縣に行啓在らせらるるに際し大正十四年十月十五日日本館に台臨を賜ふ誠に本館無上の光榮なり、大正十四年九月二十一日秋田縣商品陳列所の名稱を秋田縣物産館と變更し同年十一月十九日商工大臣の認可を得現在の所に移轉し以て本縣商工業の一層の振興發展を圖らんとす。

在縣外物産館 本縣物産を北海道、樺太方面に紹介し併せて販路の擴張を圖らんか爲明治四十四年札幌市に物産館を設立せるも大正五年以降は之を民營に移し更に小樽、大泊に委託販賣店を設けしめ縣より補助金を交付して其の進展を圖り又秋田縣商工協會は縣費の補助を得大正十二年以來北海道、樺太に出張販賣を開催し或は視察員を各方面に派遣し以て物産の紹介に販路の擴張に努めつつあり。

工業試驗場 本縣に於ける醸造業、金屬工業、木材工業は其の原料頗る豊富なるを以て之に加工精製するの途を講ずるに於ては本縣産業の開發に資すること

尠からざるものあるを以て大正元年山本郡能代港町に縣立工業講習所を設置し木工、漆工に關する徒弟を養成し斯業の發達を圖りつつありしか昭和二年度より之を工業學校に變更し更に工業試驗場を設置し醸造部を秋田市上中城町に置き醸造に關する試験を又工藝部を物産館構内に建設し木材工藝、金屬工藝の試験研究を又昭和四年度より川連分場を雄勝郡川連村に設置し漆器に關する試験を爲し以て斯業の隆昌進展を圖りつつあり。

定期航路 本縣船川港は日本海岸有數の良港にして曩に國庫の補助を得て築港に着手し竣工の期近きに在り而して船川鐵道に依り海陸の連絡を得貨物の集散次第に多きを加ふ又土崎港も昭和四年度より築港に着手す茲に於て本縣は交通關係最も密なる北海道、樺太との定期航路を開くの要を認め大正八年度より船川、小樽間(毎月四回)大正十二年度よりは船川、大泊間(年十六回)の二線を開始し更に昭和三年七月より土崎、根室間(毎月二回)の一線を新設せり又大正十五年度政府より受命の下に浦潮航路を開始せらるるや本縣船川港選はれて其

年次	輕油		機械油		原油		其他		計
	數量	價額	數量	價額	數量	價額	數量	價額	
昭和三年	一五四、六五六石	一、三九一、九〇三円	一〇四、九八九石	二、二六七、七六一円	四八二、六四一石	三、二〇四、九九七円	五、五〇九、三〇二円	八八二、六七五円	
昭和二年	一九〇、三四〇	一、二九五、九八一円	一七六、一六六	三、一八四、一八三円	六三二、二六三	三、三二六、一八九円	三、七三三、〇五五円	〇、九〇、四〇一	
昭和元年	一九五、四〇一	一、八四四、九九四円	一三四、〇二四	二、七二八、一八七円	六六八、九七〇	二、九〇四、一六六円	八、二〇〇、六五三円	三、三三三、〇〇六	
大正十四年	一七三、八〇九	一、七〇二、三五二円	一四二、二三三	二、七六〇、三六三円	八八七、七二八	七、五〇九、八三六円	五、〇五七、六八〇円	三、〇三九、五七六	
大正十三年	三三三、三八九	三、五二〇、七六七円	一五五、〇七〇	四、三二七、九四九円	八四二、八二四	九、一八九、五九六円	九、六四五、二二二円	三、六、五七五、三八七	

第七章 産業組合及農業倉庫

第一節 産業組合

本縣に於ける産業組合は産業組合法發布せられし後三年即ち明治三十六年十月十二日仙北郡土川村心像部落に無限責任心像信用組合の設立を見たるを以て蓋本縣産業組合の嚆矢なりとす、其の後毎年二三組合の設立を見たりしか明治四十一年鹿角郡に於て創立費を補助して各町村部落等に設立せしめたるを始とし各地に設立するもの簇出し明治四十三年末には其の數七十八を算するに至れり然れとも其の規模概ね狭少なるのみならず組合精神を十分理解せざるを以て組合多きも事業成績の見るべきもの殆どなかりき偶々大正三年東北地方稀有の凶斂に際し本縣にては之か救済策の一端として被害地に對し組合員一人宛參圓乃至五圓の補助金を交付することとなれり、此の結果設立許可を申請するもの

激増し同年末に至りては其の數二百七に達するに至れり之より發明治四十四年一月に産業組合中央會秋田支會の設立あり又大正二年縣に於ては專任の指導獎勵吏員を置き相提携し之か普及改善に努めたる結果年と共に其の面目を改むるに至れり而して大正六年産業組合法改正となり其の機能を擴大せられたると共に之か監督制裁嚴重となれるを以て縣に於ても亦産業組合法施行細則並産業組合事務取扱規程を改定し同時に組合獎勵方針を定め成績不良にして到底存續の見込なき組合約二十に對し諭示解散を爲すに至れり斯くて昭和三年末現在數は二百四十六組合となれり又大正三年十二月全縣を區域とせる保證責任秋田縣信用組合聯合會設立せられ大正九年には新に保證責任秋田縣北購買組合聯合會並有限責任雄勝郡購買利用組合聯合會成り更に昭和三年三月十日保證責任秋田縣販賣組合聯合會の設立を見るに至れるか次て昭和四年十一月二十五日購買事業をも兼營することとなれり尙指導獎勵を周密ならしむるには各郡に中央會と系統を同じふする部會の設置を必要とし各郡當局及當事者を督勵して大正八年迄

に全部に之を設置せしめたりしか大正十五年七月郡役所廢止に伴ひて部會廢止せるもの二郡あり又改正法に基き市街地信用組合を經營したる者は有限責任秋田共益信用組合、有限責任土崎信用組合及有限責任横手信用組合の三なりとす要之明治三十六年心像信用組合設立以來大正三、四年頃迄は本縣組合の初期にして即ち創設時代に屬し其の後専ら之か普及獎勵を計るの急なりしか爲理事者の選擇、資金、組合員數の多寡、區域の廣狹、組合精神の普及、對外關係等に就き充分なる調査を遂げさりしを以て其の結果有名無實の組合少からさりしは組合普及時代としては蓋し止むを得さりしならむ其の後は組合數の増加よりも寧ろ之か改善整理即ち内容の充實に意を注ぐに至り一般組合も亦漸次省察の時代に入りたるを以て自ら地方産業經濟及民風作興に貢獻したる組合少からさるに至れり其の間産業組合中央會の表彰を受けたるもの無限責任西馬音内大戸信用購買組合、有限責任平澤町信用購買販賣利用組合、有限責任秋田共益信用組合、無限責任元城信用組合、有限責任宮川信用購買販賣組合、有限責任神信用購買販

賣利用組合、有限責任本城信用購買販賣利用組合、有限責任大曲信用組合の八組合にして本縣産業組合は最近時勢の進運に伴ひて益々活動の機運に向ひつつありされと未だ組合の設立なき町村五十一を算するは組合の普及全からざるものにしてこれに對して極力設立を慫慂しつつあり、今組合成績累年比較を掲ぐれば左の如し

組合成績累年比較 (各年度末現在)

組合數	員數	出資總額	貸付高	貯入金	販賣額	購買額	利用料
大正六年	三〇	三、九九六	四三〇、八二三	九八八、四五七	四三三、一〇二	六三、一四〇	一九二、八九六
大正七年	二七	三、九三八	五四〇、八〇一	一、三五三、一三八	一、〇〇〇、三三三	二五二、一六五	八、四八二
大正八年	三〇	二六、五四六	七〇八、九九二	二、八七〇、三三三	三、二四、八四六	五二二、〇〇六	三、五四八
大正九年	三三	三七、三〇九	一、一八六、八五四	四、五六二、七九九	三、六三三、九一六	一、四三〇、八七〇	三、八一五
大正十年	三四	四三、一七九	一、六三三、五三三	六、三九九、九三八	四、三五八、八五九	一、七七九、四六二	四、九六二

大正十一年	三五	四九、〇六六	二、〇〇一、四二七	八、九八一、八五八	六、二四二、三八二	一、四九、九六六	二、四〇二、七二六	八、五二七
大正十二年	三五	五三、五八五	二、三五四、一九三	九、九二四、六五五	六、五〇一、六九五	一、七二五、一五七	二、六七二、五二六	一三、二一八
大正十三年	二六	五六、六九六	二、五九六、一七三	一、五二一、三三五	九、〇五三、二〇六	一、五七五、五八四	三、一五〇、〇四四	一八、九二八
大正十四年	二五	六〇、三九九	二、九〇一、二五二	八、四四一、二四〇	一〇、四一六、五八八	二、〇四四、一〇〇	三、三三五、四七九	六七、二二三
昭和元年	二五	六〇、六四一	三、〇九九、二九一	六、七七七、八四九	二、九七七、〇〇一	一、七六八、一三七	三、一四五、〇三四	三五、五七三
昭和二年	二四	六二、八二五	三、三七一、〇三二	八、三五二、二五八	一、三三〇、五九二	一、九六三、五九八	二、五九五、八一四	五三、四〇四
昭和三年	二四	六七、六三四	三、五三三、一三五	九、五八八、六二二	一、三七六、三九〇	二、四九九、六七四	三、〇一一、二四〇	二九、五二九

第二節 農業倉庫

本縣は米穀を主要農産物とする關係上農業倉庫の普及發達の如何は至大の影響を及ぼすは論を俟たざる所なり之か濫觴を見るに由利郡平澤町に設立せられたる平澤共同倉庫を嚆矢となす右は山形縣酒田町山居倉庫に範を採り明治三十八

年十一月創立に係るものなり其の後大正六年農業倉庫業法發布せらるるや逐年増加し昭和三年保證責任秋田縣販賣組合聯合會の設立と共に聯合農業倉庫の設立を見昭和四年末現在に於ては農業倉庫經營主體四十、其の棟數百十三、坪數五千四百三十二坪餘其の收容力米四斗八五十三萬四千五十二俵にして本縣米産額の一割以上に達し最近一箇年の入庫米百餘萬俵を算し今後聯合農業倉庫の活動に伴ひ益々發達の状態にあり、今農業倉庫の概況を左に掲ぐ

一、經營主體及棟數、建坪並收容力 (昭和四年末現在)

名	稱	棟數	建坪	收容力	名	稱	棟數	建坪	收容力
有富川村信購販	利	九	一四〇・七五	一一、四二〇	有販利實業農業倉庫		一	三〇・〇〇	五、〇〇〇
有曙信購販	利	一	六六・〇〇	五、〇〇〇	有柳村信販購利		四	一三三・〇〇	九、〇〇〇
有本城信購利販		一	二四・五〇	一、九〇〇	有種梅信購販利		一	三〇・〇〇	五、〇〇〇

有上川沿信販購利		一	一三・七五	一、〇〇〇	有追分信購販		二	一五・六〇	一五、五〇〇
有尙徳信購販		一	四〇・〇〇	三、九〇〇	有矢嶋信購販		三	一三一・一〇	一四、〇〇〇
有新屋販		一	一〇〇・〇〇	三、〇〇〇	有金浦町購販		五	一六二・五〇	一六、二〇〇
有平澤町信購販利		六	一九七・〇〇	二五、〇〇〇	有羽廣信購販利		一	一一・三七	六、六〇〇
有岩谷村信購販利		二	一三四・〇〇	一三、四〇〇	有中仙購販		四	一五七・〇〇	一五、〇〇〇
有西目村信購販		二	一〇八・〇〇	一一、〇〇〇	有辛酉販購利		三	二三一・五〇	二二、〇〇〇
有大正寺村信購販		一	二五・〇〇	一、五〇〇	有購販仙北西部農業倉庫		二	八七・〇〇	八、五〇〇
有龜田町信販購		三	三三・〇〇	三、六〇〇	有仙北販購		九	五〇九・〇〇	四三、九〇〇
有鮎川村信購販		二	八一・〇〇	九、七〇〇	有角館販購		一	一〇一・〇〇	一〇、〇〇〇
有象潟上郷上演購販利		六	二五七・〇〇	二四、〇〇〇	有平鹿共同販購		三	二九六・〇〇	二八、〇〇〇
有東瀧澤信販		二	一〇八・〇〇	一〇、八〇〇	販購利十文字農業倉庫		三	三三六・〇〇	三二、六〇〇
有本莊販購		八	四五一・三〇	四七、九二〇	有淺舞信購販		二	一四二・〇〇	一五、〇〇〇

有雄勝共同販	三	一五〇・〇〇	二、五〇〇	有川添信購販	二	六二〇・〇〇	四、七〇〇
有里見信購販利	一	一五〇・〇〇	二五、〇〇〇	有田代村信購販利	一	三三〇・〇〇	三、〇〇〇
有大森共同販	一	六九・三〇	六、五〇〇	有三輪信販購利	一	五〇〇・〇〇	七、五〇〇
有館合共同販	二	九六・五〇	八、五二二	有四馬音内販利	二	一四七・五〇	一八、五〇〇
有小出村信購販利	二	七三・〇〇	八、〇〇〇	有沼館信購販	四	二四一・〇〇	二四、九〇〇

第八章 社會事業

第一節 社會事業に関する機關

(一) 秋田縣社會事業調査會 各種社會事業の普及發達に資せんか爲昭和二年四月社會事業調査會を設け官民二十五名の委員を委嘱し常に之か調査研究を行ひ目的の達成に努めつつあり。

(二) 秋田縣社會事業協會 社會事業の連絡指導を目的とし基金壹萬貳千圓を有し毎年千五百圓内外の豫算を以て事業を行ひ縣下社會事業の發達に努めつつあり縣は毎年壹千圓内外の補助金を交付し之を奨勵す。

(三) 方面委員制度 一般社會状態を調査し相互扶助の精神に基き生活の改善向上を圖る爲大正十五年十月方面委員規程を發布し同時に執務心得取扱事項の概目を定め昭和二年二月一日秋田市、大館町、能代港町、土崎港町、新屋町、本

莊町、横手町、増田町及湯澤町の一市八箇町に七十七名の委員を委嘱し同年三月五名、十二月一名を増員し総員八十三名となし更に昭和四年二月新に十三箇町村に七十二名の委員を増設し即ち合計一市二十一箇町村百五十五名と爲し同年九月九日更に秋田市及能代港町に十一名を増員し同年八月二十五名、昭和五年三月八名を夫々増員して総員百九十九名に變更し昭和五年五月新に八箇町村に五十七名の委員を設け現在一市二十九箇町村に亘り総員二百五十六名となし各方面地域毎に方面委員会を設置し各一名宛の常任委員を置き毎月一回各方面地域毎に例会を開き委員取扱事項の打合せ研究を爲す又各方面地域毎に方面事業後援會を設け委員の活動を援助しつつあり、設置地域及委員の定數左の如し

市町村名	委員數	市町村名	委員數	市町村名	委員數
秋田市	三	新屋町	三	花輪町	九
				西馬音内町	五

大館町	三	本荘町	三	小坂町	二	一日市町	五
能代港町	三	船川港町	三	馬場町	二	東雲村	八
土崎港町	三	増田町	三	花岡村	三	五城目町	五
横手町	三	湯澤町	三	眞中村	七	濱田村	五
矢嶋町	六	角館町	六	大曲町	八	峰吉川村	四
平澤町	九	龜田町	六	郷計	一〇	刈和野町	五
岩崎町	五	米内澤町	八	合計	二五六		

第二節 兒童保護

一、育兒相談所 兒童の保育及健康増進を目的として育兒相談所を設置せるもの左の如く概ね毎週二回乃至一箇月數回開所す
 秋田市、秋田市醫師會館、雄勝郡岩崎町、平鹿郡山内村、由利郡平澤町、山

本郡能代港町、河邊郡種平村

二、託兒所 (イ) 常設託兒所 本縣に於ける常設託兒所の設置左の如く何れも相當の成績を挙げつつあり

南秋田郡土崎港町(私立一) 雄勝郡岩崎町(町立一)
 山本郡能代港町(私立一) 秋田市聖心愛子會 (二)

(ロ) 農繁託兒所 農繁託兒所は數年前より縣下各町村に奨勵し春秋二回に涉り之を設置せしめ兒童の保護を兼ね一面作業能率の増進を期せしめつつあり、最近に於ける設置數左の如し

- (一) 昭和三年度二十箇所(主として小學校の主催なり)
- (二) 昭和四年度二十五箇所(同上左表の通)

昭和四年度農繁託兒所調

託兒所名	開設場所	開設期間	託兒數	同人員	保母	經費	補縣助費
尾去澤小學校農繁期託兒所	小學校	六月三十一日	二八	一三	二	三〇円	一五円
長谷川小學校同	同	六・八一	八四	四三	三	三五	一七
宮鹿小學校同	同	六・〇一	八〇	五九	八	三五	一三
曙小學校同	同	六・〇一	五六	三三	四	二八	一七
末廣小學校同	同	六・三	五三	四八	一	二八	一四
錦木小學校同	同	六・〇一	五三	三三	一	二八	一四
川添村同	同	六・〇一	九〇	六六	五	四〇	二〇
種平村同	同	六・二	六三	三九	四	三三	一〇
戸嶋小學校同	同	六・七	六〇	四八	四	三〇	一〇
米内澤町同	同	六・〇一	七〇	四六	三	二八	一〇
大葛村同	同	六・五	四〇	一六	二	二五	一〇

申詔書の趣旨に基き家族制度に依り教養し學科教授は大正十三年より市立小學校に通學せしめ其の課程を修了せる者には希望を斟酌して相當なる職業に従事せしむ。

(二) 聖心天使團 聖心愛子會の經營に係り大正九年創立し孤兒並幼兒の爲勞務に従事し能はざる者の子弟を收容保育す收容兒の年齢は乳兒より之を領り男子は學齡より感恩講保育院に依託す昭和四年末現在收容數十三名中男四名、女九名なり。

第三節 感化教育

秋田縣陶育院 明治三十三年法律第三十七號感化法に基き明治三十七年之を創立す爾來現今に至るまでの收容人員百六名、退院八十五名にして現在二十一名在院す其の内譯は院内收容十五名、委託五名、假退院一名なり而して退院者八十五名に付き其の後の狀況を觀るに尙不良なる者八名、生死不明の者七名あり

て其の他は夫々農業、工業等に従事し誠實に生活しつつあり收容者には小學校の課程による學科及實科を課し作業による収入は之を貯蓄せしむ。

第四節 經濟保護

(イ) 住宅供給

(一) 公營住宅 本事業は縣下樞要地に於て漸次之か施設を見るに至り秋田縣社會事業協會、秋田市、大館町、北浦町、湯澤町に於て各數十戸の住宅を建築し一般住宅の拂底を稍緩和せしめたる觀あるも尙之か獎勵を要す殊に農漁村の住宅改良を急務となし此の方面に對し獎勵の必要を認め昭和三年以來之を計畫し現に鹿角郡宮川村及曙村に於て各二十戸宛改良住宅建築中なり。

(二) 住宅組合 住宅難緩和の爲大正十年住宅組合法公布以來住宅組合設立獎勵に努めたる結果現在十四組合、建築戸數三百五十戸、組合員三百五十名あり。

(ロ) 公益質屋 昭和二年三月公益質屋法の發布以來之を經營せるもの由利郡平

澤町、南秋田郡南磯村、河邊郡新屋町及南秋田郡一日市町小柳感恩講の三箇町
 村一公益團體にして昭和四年度に於ける各公益質屋の事業成績左の如し

昭和四年度各公益質屋事業成績

公益質屋平澤町庶民金庫

(貸付状況)

區別

職業別利用者	労働者		生活者		小工業者		小商人		農業者		漁業者		其他		計
	労働者	生活者	労働者	生活者	労働者	生活者	労働者	生活者	労働者	生活者	労働者	生活者	労働者	生活者	
	二七	三六	一五九	一三六	八四	一三五	一六八	八四五							

貸付種類	債券		家具		装身具		衣類		其他		計	
	口數	點數	口數	點數	口數	點數	口數	點數	口數	點數		
	七	一九	二五	八九	一三〇	一七二	七二八	二、九八七	三六五	四、六九三	一、四二三	八、八八九

(辨済状況)

區別

職業別利用者	労働者		生活者		小工業者		小商人		農業者		漁業者		其他		計
	労働者	生活者	労働者	生活者	労働者	生活者	労働者	生活者	労働者	生活者	労働者	生活者	労働者	生活者	
	六三	三三	一三〇	七三	五七	七七	一一〇	五八〇							

貸付種類	債券		家具		装身具		衣類		其他		計	
	口數	點數	口數	點數	口數	點數	口數	點數	口數	點數		
	九	一九七	八	六七	九	二九	三二	二、一〇八	二六	二、五三六	一、〇二五	五、六二六

貸付金額	一		口		平均		各月末現在貸付金額
	口數	點數	口數	點數	口數	點數	
	一七、六八四	二、三三〇					年度末現在

貸付金額	二、三、二五	貸付金ニ對スル利子	五九三
------	--------	-----------	-----

財團法人小柳感恩講公益質屋
(貸付状況)

區別

職業別利用者	労働者	生活者	小業者	小商人	農業者	漁業者	其他	計
	五八	五九	二〇	一三七	七六	六一	三六九	二、〇八

實物種類	債券		家具		裝身具		衣類		其他		計
	口數	點數	口數	點數	口數	點數	口數	點數	口數	點數	
	三五	四六	五〇	二九三	八五	一〇一	一、七九	六、八四六	一五二	九四七	二、〇八〇
											八、三三三

貸付金額	九、五八四	一口平均	四、六〇〇	各月末現在貸付金額	四、二九八
------	-------	------	-------	-----------	-------

(辨濟狀況)

區別

職業別利用者	労働者	生活者	小業者	小商人	農業者	漁業者	其他	計
	五〇	六九	七二	一〇七	六八〇	四九	三三二	一、八八八

實物種類	債券		家具		裝身具		衣類		其他		計
	口數	點數	口數	點數	口數	點數	口數	點數	口數	點數	
	四四	六四	六四	四四二	七九	九九	一、四九九	五、六五八	一六三	八三三	一、八二八
											七、〇八四

貸付金	貸付金ニ對スル利子
810 <small>円</small>	8 <small>円</small>

(ハ) 公設市場 日用必需品の供給を目的とする公設市場を設置經營するもの
 狀況左の如し

名 稱	經營主體	設 立 年	位 置	設 備	成 績
秋田市公設市場	秋田市	大正十二年	秋田市東根小屋町店舖	六	一箇年賣上高 八四、九九 <small>円</small>

(二) 宿泊保護

(1) 大館無料宿泊所 北秋田郡大館町篤志家宮崎亥助の個人經營に屬し大正十二年六月之を設置し主として貧困旅行者の救護を目的とするものにして毎年百數十名を取扱ふ。

昭和四年中(十一月より十二月まで)の取扱成績左の如し

宿泊實人員	同上延人員	無料給食回数	金品給與額	經費豫算
二五五	九八五	三〇五	一三、〇八 <small>円</small>	七三〇 <small>円</small>

(2) 秋田無料宿泊所 昭和四年九月市内の篤志家を以て組織し秋田市上中城町三番地に宿泊所を設け藤原幸之助之を代表し經營す九月より十二月迄の取扱成績左の如し

宿泊實人員	同上延人員	無料給食回数	金品給與額	經費豫算
一八	一五七	三九三	一〇、七六 <small>円</small>	一九三 <small>円</small>

(ホ) 共同浴場 縣内に於ける共同浴場左のし

名稱	經營主體	設立年	一箇月平均開場日數	備考
藤の湯	雄勝郡岩崎町	大正十一年	〇	一人二錢一日平均百人
北浦	南秋田郡北浦町	昭和二年	〇	同
湯本	同	同	...	同
下の湯	鹿角郡大湯町	大正七年	〇	無料一日平均三百五十人
川原湯	鹿角郡大湯町	大正八年	〇	同
上の湯	鹿角郡大湯町	大正十年	〇	同
大瀧	北秋田郡十二所町	同	〇	同

(へ) 授産事業 秋田就業會は細民に授産の目的を以て設立したる元秋田慈善會と日露戦役の際軍人遺家族に授産の目的にて設立せる秋田授産會とを合併し明治四十二年財團法人となしたるものにして細民及軍人遺家族に對する授産を目

的とす作業は主として實子網及裁縫の二種にして組織以來の従業者延人員十三萬餘人に達す。

第五節 労働保護

一、職業紹介所 縣内に於ける職業紹介所の設置左の如し

名稱	所在地	設立年月日
秋田市職業紹介所	秋田市下中城町	大正十三年四月五日
能代港町職業紹介所	山本郡能代港町	大正十五年十月一日
土崎港町職業紹介所	南秋田郡土崎港町	大正十五年十月一日
横手町職業紹介所	平鹿郡横手町	昭和二年五月二十日
大館町職業紹介所	北秋田郡大館町	昭和二年六月十四日
船川港町職業紹介所	南秋田郡船川港町	昭和二年八月二十日

本庄町職業紹介所	由利郡本庄町	昭和二年十二月十九日
花輪町職業紹介所	鹿角郡花輪町	昭和四年八月三十一日

右各職業紹介所共少年職業選擇指導に關し附近町村に於ける小學校を職業紹介
聯絡小學校として合計九十一校を指定せらる

各職業紹介所昭和四年中(一月より十二月まで)の取扱成績

紹介所名	求人數	求職者數	紹介者數	就職者數
秋田	七九	九三五	四八〇	四三三
能代	九五〇	八九九	六八	六八二
土崎	五九五	六〇六	四三	三〇八
横手	五三六	四六〇	三二	二八六

大館	船川	本庄	花輪	計
二八七	三三	二五三	二	二、四四五
二七	四八	二〇六	三、四三三	三、八四四
一七	三	一四	三、三三	二、七七七
一〇	九	三三	二、三三〇	二、三三〇

備考
前記の外鹿角郡小坂町職業紹介所は昭和五年八月十三日認可せられ即時事務を開始す

二、出稼勞務者保護組合 縣内より北海道、樺太及露領カムサツカ方面に出稼
する漁業勞務者は毎年約一萬人の多數に及び之か保護施設として各町村に保護
組合の組織ありて現に九十六組合の設置あり而して之か一丸となり秋田縣出稼
勞務者保護組合を設け罹災者の共濟等を行ふ昭和四年度に於て該組合を経て出
稼したる者五千五百餘名に達し本施設の理解と共に數年ならずして全部加入す

るものと見受けらる而して本施設は單に漁夫のみに止らす約八千名を有する出稼女子勞務者をも包含せむとしつつあり。

第六節 罹災救助

罹災救助基金法に基き明治三十二年十月罹災救助基金管理支出及補充方法を定め罹災救助基金の蓄積を爲し非常災害に際し貧困の爲食料、被服、小屋掛、醫療、就業用器具資料、學用品等を得ること能はざる者に對し其の救助を爲しつたり現在蓄積金百參萬六千九百貳拾九圓に達す明治四十五年三月縣は市町村罹災救助基金穀補助規程を設け同基金蓄積條例の設定を督勵し且毎年蓄積すべき金額の二分の一の補助を爲しつたり現在蓄積條例設定町村二百三十一箇町村蓄積高八拾四萬八千參百參拾四圓を示せり。

第七節 窮民救助

恤救規則に基き國費を以て救助せるもの三十名の外縣は賑恤規則を設け大正五

年以來縣費を以て救助を施行し其の被救助者五十六名を算す町村又相當經費を豫算に計上し國縣救恤と相俟つて貧困者の救助を爲し餓餓なからしめつつあり感恩講 文政十一年藩主佐竹義厚侯の用達人那波三郎右衛門祐生の主唱により七十二名の有志と共に醸金して組織せる濟貧恤窮の財團にして本縣に於ける社會事業の濫觴なり爾來百有餘年此の種の窮民救助の財團は皆之に倣ひて縣下各地に創設せられ現在十八團體に及ぶ而して感恩講（秋田市）の資産は

- (1) 公債額面拾參萬五百圓
- (2) 田五十町四段一畝二十步
- (3) 畑一町七畝十九步
- (4) 土藏七棟、家屋五棟
- (5) 現金約五萬圓
- (6) 其他救濟用保管穀二千三百石、玄米四百五十餘石を有す平時は毎月五日、二十日の兩度に於て施米を爲し極寒に際して衣類、木炭をも施與す、毎年の施與延

人員二萬五千名に達す其の他の縣下各地に十七感恩講及類似の救助團體及財團
 四あり各數萬乃至拾數萬の資産を有し夫々救助の事業を行ふ。
 軍事救護法に依る昭和四年度救護狀況左の如し

郡市別	傷病兵		下士兵卒又ハ 傷病兵ノ家族		下士兵卒又ハ 傷病兵ノ遺族		計	
	戸數	人員	戸數	人員	戸數	人員	戸數	人員
秋田市	1	3	1	10	1	2	3	15
鹿角郡	1	1	1	10	1	2	3	15
北秋田郡	1	1	1	10	1	2	3	15
山本郡	1	1	1	10	1	2	3	15
南秋田郡	1	1	1	10	1	2	3	15
河邊郡	1	1	1	10	1	2	3	15
計	6	16	6	60	6	12	18	90

一、「傷病兵」の關括弧内の戸數人員は「傷病兵の家族」の關の戸數人員と重複す
 二、「下士兵卒又ハ傷病兵の家族」及「下士兵卒又ハ傷病兵の遺族」の關右は下士兵卒の家遺族左は傷
 病兵の家遺族とす

郡市別	傷病兵		下士兵卒又ハ 傷病兵ノ家族		下士兵卒又ハ 傷病兵ノ遺族		計	
	戸數	人員	戸數	人員	戸數	人員	戸數	人員
由利郡	1	1	1	10	1	2	3	15
仙北郡	1	1	1	10	1	2	3	15
平鹿郡	1	1	1	10	1	2	3	15
雄勝郡	1	1	1	10	1	2	3	15
計	4	4	4	40	4	8	12	60

第八節 行旅病人及行旅死亡人取扱並精神病者監護

行旅病人及行旅死亡人取扱 行旅病人及行旅死亡人取扱法に基き明治三十三年

十月縣訓令甲第百二十號を以て之か手續を定め取扱しつ々あるか昭和四年度に於ける取扱状況左の如し

區分	取扱人員	縣費・支辨額	
		人員	金額
行旅病人	六	二	八四三
行旅死亡人	五	二	一三六
計	三	三	九七九

精神病者監護 精神病者監護法に依り市町村長に於て精神病者を監護したる場合の費用は行旅病人及行旅死亡人取扱手續に準して支辨すへき旨明治三十三年十月縣訓令甲第百二十一號を以て定めたるか昭和四年度中に於ける被監護者四名にして内三名に對しては縣費を以て五百拾參圓を支辨しあり。

第九節 醫療保護

一、診療所

(イ) 秋田市診療所 秋田市營にして昭和二年十二月創立す中流以下の生活者の實費診療を目的とし利用者多く成績見るべきものあり昭和四年中受診延人員一、八四二人、一日平均三二人に達す。

(ロ) 聖心醫院 秋田市保戸野新町にあり聖心愛子會の經營にして大正十一年六月創立す診療所及病床二四を有し主として輕費及無料診療をなす、昭和四年中受診延人員二、八七七名に達したり

(ハ) 盲人保護 大正十五年調査に依る本縣盲人數は全盲者一、二〇八名、準盲七九一名之に準し盲者に屬するもの四一六名、合計二、四一五名の多數にして全國稀に見る所なるを以て之か保護施設として昭和三年度より盲人檢診を行ひ開眼見込あるものは新潟病院に入院せしめ熊谷博士の治療を爲さしめつつあり。

昭和三、四、五の三箇年に於ける成績を示せば左の如し
(1) 受診者總數 一、三七三人

(2) 内開眼又は恢復見込ある者

六一二人

(3) 治療したる者

二〇八人

(4) 内貧困者にして縣費補助の者三七人（一人四〇圓宛一、四八〇圓支給）

第十節 教化事業

一、秋田至仁會 釋放者は社會の種々の事情に依り正業に就く事能はずして餘儀なく再び罪を犯すの止むなきに至るもの多きを以て明治三十三年九月故川村養助氏は有志の助力を得て秋田出獄人保護所を創立し明治三十六年七月之を財團法人に組織を變更し大正八年七月秋田至仁會と改稱し創立以來保護せるもの千五百有餘名に達す、本事業に對し年々宮内省より獎勵金の御下賜を受けつつありて縣は亦毎年慈惠賑恤基金より相當額の補助金を交付す。

二、秋田縣教化事業聯合會 縣下各種教化團體を網羅し昭和四年三月之を組織し各教化團體及教化事業關係者と連絡を採り社會教化に努めつつあり現在聯合

會の構成團體三十二團に及ぶ

第十一節 社會教育

青年訓練所 大正十五年四月青年訓練所令發布後縣は直に青年訓練所設置要項を示して之か設立を獎勵したる結果一市二百三十六箇町村一齊に設置するに至りたれとも獨り北秋田郡澤口村に於ては私設あるのみにして遺憾の状態にありしか昭和四年度に於て村立を見るに至れり尙昭和四年度中に於て補習學校學則改正の訓令發令と共に同學則改正の認可を見たる町村に於ては之を廢止し補習學校に充當希望のもの續々出てたるも其の内容を調査し以て充當認可したるもの十箇訓練所に及べり生徒の入所率は昭和三年度に於て七二・一三の處同四年度に於ては七七・五六を出し出席率三年度の五三・八七と比するに稍良好の率を示すの状態に在れとも尙未だ雇傭者並父兄一般の理解乏しきの感あり爲に縣に於ては機會ある毎に入所出席率の向上、生徒督勵上の機關設置を促し或は管

内數箇所にて短期の教練指導者講習會を開催して指導者の啓發を圖り縣内中等學校配屬將校の郡部擔當教練實地指導を委囑し或は訓練所合同研究會、野外演習等の開設を奨励し又時々印刷物を配布して之か參考の資料に供し以て成績の向上を企圖しつつあり、今昭和四年度の現況を示せば左の如し

訓練所 總數	内		村	市町 村數	訓練所へ 入所スヘ キ者ノ數	入所 者數	前年修了 シタル者 數	職員數	經費	一訓練所當
	市	町								
二九	三	三	三	三	二九、五五	三三、九六	二、四六	二九	一、七三	一六、〇四
五九										

青年團 青年團の設立は夙に縣下各市町村に普及したりしも其の組織内容並活動の上に遺憾多きを以て内務、文部兩大臣の訓令に基き大正五年二月縣訓令を以て施設要項を定め準則を示し専ら修養機關として其の活動を促せり大正九年十二月更に訓令を發して團員指導の目標を示す所ありしか漸次發展の氣運に向ひたり本縣各市町村青年團は一市町村に一團を設置するを常例とし市町村青年

團は郡市聯合青年團を郡市聯合青年團は縣聯合青年團を組織し更に秋田縣聯合青年團は大日本聯合青年團に加盟し以て相互の連絡を圖り之か向上發達に努力しつつあり尙聯合青年團の事業は凡そ各種講習會、講演會、體育會、團報發行優良青年團表彰大會等にして其の現況左の如し(昭和四年度)

團體數	市	町	村	團員數	正團員數	正團員 年齡 範圍	經費	一團一人 當	事業概況(各町村ノ分)
二五三	一	四九	二〇三	一三	二四〇五、四六二八、七三三三、七四八	最低三 最高三〇	四四、三二	一七五〇、八三	各種ノ講習會、講演會、修養發表會、體育會、演奏會、團報發行、表彰、敬老會、展覽會、視察旅行

女子青年團 青年團は男女兩々相與に之か堅實なる發達を圖らざるへからず然るに本縣の實情に徴すれば近年長足の進歩を見たりと雖女子青年團體に在りては一層其の發達を促すの要切なるものあり依つて昭和二年三月内務、文部兩大臣の訓令に基き縣訓令を以て女子青年團設置要項及準則を示し既設團體の組織

ん事に努力しつつあり特に昨年度に於て教化運動の實績向上に努め且各町村に教化委員會の設立を促したる爲風教の改善、經濟緊縮、民力の涵養等實行規約し其の成績顯著なるものあり。

圖書館 圖書館は縣立一、同分館七、町村立二一、私立二あり又町村に於ては各種の文庫、圖書縦覽所を設けたるもの尠からず昭和三年御大典を記念する爲此の種のもの漸次増加しつつありと雖更に振興を促すの要あるを以て縣に於ては昭和三年度より獎勵金を交付し或は圖書館長及圖書館關係者會議を開催して之か設置獎勵と内容の充實並其の機能の發揮に關する努力を促せり縣立秋田圖書館の現況左の如し

縣立秋田圖書館	秋田市東根小屋町	明治三十二年四月	昭五年度經費豫算	昭五年度一月一日現在	閱覽人員
			總額 三、一九五	藏書冊數 八七、六四六	昭和四年度一日平均閱覽人員 二九、四五三
			購入費 八、五〇〇		
					二二

第九章 警察及衛生

第一節 警 務

警察官署 本縣は一市九郡面積七百六十方里餘にして警察署二十六あり、河邊郡及南秋田郡の一部は秋田市と共に秋田警察署之を管轄す其他各郡には二乃至四の警察署を置く警察署の所在地に在りては二以上の受持區あるときは組合を設け共同巡行區と爲し又署所在地外に在りては概ね町村の區域に依り一駐在所を設け其の數二百二十、警部補派出所二、巡查部長派出所十八箇所あり。

警察官吏配置 警視は警察部勤務二名及秋田警察署長の三名にして警部は現員二十二名の内警察部課所長五名、其の他課僚四名、秋田警察署一名、郡部配置十一名、警部補は定員三十四名の内警察部勤務十名、秋田警察署三名、郡部配置二十一名なり而して郡部にある警部は警察署長として配置し警部補は警察署長

若は土崎、大館、能代、本荘、大曲、横手の各署及横堀、森岳各警部補派出所に配置す。

本縣巡査の定員は五百七十六名にして市郡に於ては人口七百四十四名に對し巡査一名郡部に於ては人口千七百二十六名に對し巡査一名の割合なり、右定員を巡査部長、巡査（巡査を更に内勤、外勤、特務、刑事、高等視察係、會計）に區別し巡査部長は警察署に一名乃至六名及警部補派出所、巡査部長派出所等に配置し内勤及特務巡査は各警察署に一名乃至七名を置くも土地の状況に依り内勤巡査を配置せざる警察署あり、刑事又は高等視察係巡査は秋田、土崎、大館、能代、本荘、大曲、横手、湯澤、花輪、船川、五城目、鷹巢、米内澤、角館、小坂の樞要地に一名乃至七名を配置し會計巡査は各警察署に一名を配置し外勤巡査は警察署所在地、警部補、巡査部長派出所、駐在所、巡査派出所等に配置し尙右定員外に諸嶺山、山林其の他個人等の請願に依り巡査部長一名、巡査十二名を配置す。

警察官吏の勤務 本縣警察官吏の勤務方法は明治四十年勤務規程を設け監督業務及非常召集に大別せり其の大要左の如し

(一) 監督 巡査部長の監督は管内所定の巡視を爲すの制にして法令の行否及之に對する民心の傾向、部下巡視の精粗、職務執行の適否、民衆待遇の状況、戸口調査及視察の精否、圖書簿冊の整否、給與及貸與品保存の良否等一般の状況を監査して事務の徹底を期し勤惰賞罰を明にす。

(二) 巡査勤務 警察署及警部補派出所所在地の警邏は組合あるものは共同巡行區を設け又土地の状況等に依りて方面を分ち警邏度數の如きは警察部長之を定め勤務時間は毎日勤務に在りては八時間以上隔日勤務に在りては十六時間以上とす。

(三) 巡査非常召集 非常召集は之を大召集及小召集に分つ大召集は管内各警察署に渉る召集にして警察部長之を行ひ小召集は各警察署所轄内の召集にして警察署長之を行ふ演習の爲にする非常召集は毎年一回小召集に限り施行すること

とせり。

巡查の教養 本縣に於ける警察練習所は明治十九年七月開設し教養の回を重ねること本科生に在りては百三十六回、別科生に在りては五十三回に及へり職員は所長、教官、助教、舎監に區別し所長は警部にして教官は警部、助教、舎監は巡查部長を以て之に充つ、教養期間は本科は六箇月、別科は二箇月を原則とするも現時の社會思想に鑑み警察官は質實剛健の氣風と警察精神涵養の切なるを感し警察官全部に對し昭和三年九月より各署に付巡查數名宛警察練習所に召集し主として武道其他社會問題又は一般警察事務の短期講習を開催せり之等の施設に依り良好なる成績を挙げつつあり。

表彰 本縣に於ける警部補にして精勤を表彰せられたる者現在三十四名、巡查精勤證書を授與せられたる者現在三百五十名なるか其の内警部補十八名、巡查百六十名は貳圓乃至五圓の精勤加俸を給與せられ是等は益々自奮啓發に努めつつある結果成績一層良好なるを認む又巡查にして永年勤績し成績優良なる者

に對しては明治四十三年以來一定の賞金を添へ表彰を行ひつつあり又殉難警察官に對しては警察協會秋田縣支部に於て毎年警察署長の會同を機として遺族を招待し招魂祭を千秋公園内碑前に於て舉行しつつあり。

賞罰 警察賞與は明治四十五年以來行賞事件の範圍及賞金を倍加せられたるか昭和四年中に於て賞金を受けたる者警察官吏中三百九十二名此の金額八百六拾參圓、賞詞を受けたる者二百二十三名、人民に於て賞金を受けたる者八十九名此の金額百六拾六圓なり、懲罰は罰俸六名、呵責四名あり。

警察費 本縣警察費は昭和五年度歳出經常部豫算六拾六萬五千四百九十七圓にして本廳直接支拂を要するもの外毎年年度の初に於て各警察署中秋田、土崎大館、能代、本莊、大曲、横手、湯澤、花輪の各署に豫算を配付し仕拂命令を委任すと雖毎月警察費の仕拂證書及豫算殘高表を提出せしめ豫算の經理並維持に努めつつあり。

恩給扶助料及其他 昭和四年度中新に恩給證書を附與したる者十八名此の金額

四千七百參拾參圓、扶助料證書を附與したる者十二名此の金額千四百拾四圓、療治料、救助料等を支給したる者三十八名此の金額千五百圓、弔祭料を支給したる者五名此の金額千九百八拾九圓なり、現在恩給證書を所持する者及其の金額左の如し

恩給受給者 四百十八人 此の金額八萬五千八百七拾壹圓

扶助料受給者 二百五人 此の金額壹萬八千九拾五圓

大正九年十月警察共濟組合規則を設けられ同年十月より昭和五年三月三十一日迄に於て救濟せる者左の如し

醫療金受給者 八百九十五人 此の金額貳萬九千八百五拾五圓

死亡給與金受給者 本人三十一人 此の金額八千五百二十六圓
家族二百七十六人 此の金額五千九百四十一圓

脱退給與金受給者 三百六十五人 此の金額七千八百四拾六圓

癩疾給與金受給者 十四人 此の金額參千五百貳拾貳圓

罹災給與金受給者 三十三人 此の金額貳千八拾九圓

計

千六百十三人 此の金額五萬七千七百七拾九圓

警察電話 本縣警察電話は明治三十四年四月の創設に係り目下既設線路二百七里、線路延長四百四十九里に達し其の線路は各警察署及警部補巡查部長派出所巡查派出所並樞要地の巡查駐在所及關係官衙其他總計三百一個所に架設し又青森、山形、岩手の隣縣に接続せり。

第二節 司法警察

犯罪 本縣に於ける犯罪事件は年々四千件内外にして昭和四年中刑法犯三千五百五十七件、特別法犯七百八十七件、合計四千三百四十四件にして前年に比し四百十二件の増加を示せり、内重大犯罪にして最も多きを占むるは放火犯なるか火災總件數四百八十六件の内放火と確定せる五十八件及放火の疑あるもの二十四件を合算し百分比例を以て示せば放火犯は實に二十%を示し尙逐年増加の傾向にあり而して殺人犯十五件、強盜十二件、往來妨害十一件、傷害致死十

件等之に次く、其の他の犯罪中最も多きは窃盜犯にして一千三百四十件、詐欺犯四百八十八件、横領犯三百六十五件、失火犯二百四十九件、傷害二百三十一件、過失傷害並致死百二十二件、賭博百七件、住居侵入七十七件、業務過失傷害並致死七十四件、文書偽造六十八件にして毀棄、贖物、恐喝、業務横領等之に次ぐの狀況なり、放火犯は本縣特有の犯行にあらざるも全國各廳府縣の統計に比し其の件數最高位にあり、其の動機は輕微なる怨恨、痴情、嫉妬等の關係に基因し近年經濟界の不況に依り保險詐欺の目的に依るもの逐年増加の傾向あり、其の手段方法は漸次巧妙を極め間接放火の方法に依り計畫的に爲すもの多く失火送致件數に比し概要百分の三十%強を示し寒心に堪えず、殺人犯は怨恨、嫉妬痴情、家庭不和の動機に依るもの多く傷害致死は酒氣に乘し意見の衝突等に依るもの多し、窃盜犯は地方的犯人及窮民年少者の犯行多かりしも交通機關發達の結果旅行的犯行漸次増加の傾向あり、詐欺犯は秋田、由利、仙北の一市二郡に多く行はれつつあるも漸次減少の傾向あり、横領犯は普通横領其の大部分を

占め業務横領其の他の横領を合して百分の二十%を示し失火犯は消雪後乾燥期に發生し而も農繁期に最も多く小兒の弄火に依るもの又尠からず、傷害犯は鑛山、工事場等に多く過失傷害致死は農繁期に於ける看護義務者か幼者の看護を怠り死傷に致したるもの大部分を占め賭博犯は全縣各所に於て行はれ重に冬季及農村休日、舊盆、正月労働者出稼の爲め前借し出發前に行はる然れとも常習賭博は北秋、平鹿、兩郡に於て最も多く開帳され住居侵入の大部分は夜間婦女と姦淫の目的を以て敢行し其の多くは夏季戸締を開放し居る農村に多し又業務過失傷害及致死は未熟の自動車運轉手及工場に於ける職工等に多く文書偽造は殆んど詐欺犯實行の手段として行はれ居る實狀なり、特別法犯の最も多きは森林法違犯にして狩獵法、漁業法、度量衡法、銃砲火藥類取締法令違犯等之れに次ぐ狀況なり、違警罪即決處分中拘留刑二百四十三件、科料四千八百九十五名に達し前年に比し拘留刑の激増せるは犯罪捜査の爲め管内一齊取締を執行の際違犯事實を發見せる結果なり、本縣に於ける刑事要視察人にして旅行的職業的

常習者は二百二名、普通常習者三百六十五名、非常習者一千四百六十二名にして其の大部分は窃盗、詐欺、賭博なり、各犯罪は時期に依り適當なる方策を講じ一面之が豫防に努め既發の事犯は極力捜査し刑事警察本金の目的達成に努めつつあり。

第三節 保安

火災及消防 本縣は年々火災の數甚た多く従つて之に因る損失額亦尠からず昭和四年中に於ける火災度數四百八十六、其の損失額百一萬五千五百餘圓に上り之を最近十箇年に於ける一年平均を見るに度數に於て四百十七、損失は百九拾貳萬七千參百餘圓の巨額に達し居るのみならず火災に因りて死傷するもの尠しとせず現に昭和四年中の死者二十一人、畜類の死九頭、傷者三十五人、畜類の傷一頭に及べり。

豪雨出水の都度諸所に水害ありて之に因る損害亦相當多く從來本縣の水災に對

する警防設備は極めて不完全なりしか昭和三年一月本縣消防組綱則改正の結果水災に關する警防上の設備を強要する所あるを以て此の方面も着々設備しつつあり、又一面水利の圓滑を圖ると共に消防用具の設備を獎勵したる結果現在は消火栓六百七十六、貯水池四千二百四十三、自動車唧筒二十臺、オートバイ唧筒七臺、瓦斯倫唧筒六十六臺、腕用唧筒七百十九臺、蒸氣唧筒二臺を有し各消防組二百三十三、組員二萬二千四百六十一名に達せり而して警察官吏は各消防組と協調を保ち各種團體と連絡を採りて警火及防火上の研究實施に努め現に斯種研究機關として各警察署管毎に研究会若くは幹部會の組織成り更に各郡に郡聯合會創立して警火思想普及等に専念活動しつつあり、近時著しく豫防思想の向上を來したるも火災の原因中兒童の弄火最も多きより各學校長より警火に關する訓話を爲さしめ炬燵に因る出火防止の一策として昭和二年六月縣令を以て金屬製網の使用方を規定し火災に因る人畜の死傷を防止する爲昭和三年十月縣令を以て住家に防雪の施設を爲す場合は非常口を設け且其の除雪を勵行すべ

き規定を設けたり、縣消防義會は基金五萬七千圓を有し昭和五年度に於て縣より一千參百圓の補助金を交付せり而して消防組員の永年勤績退職者、死亡者及災害に遭ひたる者に對して共濟金を支給しつつあり、昭和三年八月は水火の災厄に殉職せる組員八名の招魂碑を千秋公園内に建立してその除幕式を舉ぐると共に慰靈祭を行ひ大正十四年四月より消防機關紙として月刊消防新聞を發行（第六十三號に及ぶ）し以て消防上の智識を注入すると同時に義會備付の映畫にて各地に警火宣傳の活動寫眞を巡演し火災豫防に大なる努力を拂ひつつあり交通運輸 本縣に於ける自動車的情勢は漸次普及發達し最近之を利用する者倍々滋くして逐年増加の趨勢に在り、現在の營業者二百七十名、車輛數五百五十を算し尙月々増加を示すの實況なり自轉車の數も亦著しく増加を來し現に三萬輛餘に及へり斯の如く兩車の急激なる發達を見るに至りたるか一面之に伴ひ交通の安全を脅威し災害事故の頻發するあり、昭和四年中に於ける自動車に因る事故は死者五名、傷者百二十五名、物件を破壊せるもの六十四件に達し之を前

年に比すれば死者一名を減するも傷者三十一名、物件の破壊十件の増加を示せり之か原因を探究するに一般交通者の交通道德に缺くる所あるも又一面運轉に従事する者の過失又は技倆の拙劣なるに基因するもの尠からざる狀況なるに鑑み縣自動車協會を設立し其の事業の一として昭和二年三月第一回、同四年二月第二回、同五年三月第三回の運轉手養成講習會を開き智識と注意力の向上に努めたる結果其の効果あるを認めたり。

諸營業 最近財界の不況に伴ひ營業の種類に依りては甚しく其の榮衰を見るものありと雖特に著しき増減なく現在數左の如し

種別	營業者數	種別	營業者數	種別	營業者數
古物商	一、三五	旅人宿	四三	實屋	一七
下宿屋	二	旅館	三	木實宿	一八

貳萬圓に達し縣内の需要のみならず幾分縣外に移出し得るに至れり、銃砲は營業者十三名あるも商況の見るべきものなく販賣數量僅かに二百五十挺内外に過す尙銃砲にして縣内に散在せるもの三千五百挺あり其の内拳銃、短銃、仕込銃仕込刀劍等を所有するもの七百名に對しては其の保管携帶等に付嚴重なる取締を實施し之か不良の徒に入手するの豫防に努力しつつあるも其の事故を根絶するに至らず、瓦斯熔接作業に使用する壓縮酸素瓦斯は土崎港町に於て一箇年三萬立方米を製造せられ直接鐵工業者に供給し益々使用量増加の景況にあり、石油は本縣か生産地たる關係上取扱數量極めて多く殊に近時自動車の普及に伴ひ「ガソリン」の需要著しく増加したる爲之か災害防止上完全なる貯藏庫を必要とするを以て其の建設に對し極力勸誘中なるも目下三十棟を設置したるに過ぎず以上の危險物取締に就ては專任の技術官吏をして巡視監督せしめ之か災害防止と法令違反者なからしむる様努力しつつあるも昭和四年中の災害事故十二件、死傷者二十三名、法令違反四十三件、人員五十九名に及へり。

狩獵 昭和四年度に於ける狩獵免許者は一千七百三十七人にして之か税額貳萬七千五百圓なり而して捕獲鳥獸數は鳥類七萬四千六十五羽、獸類三萬八千六十八頭にして之か價格約五萬六千圓なり、本縣に於て狩獵行政上鳥獸保護に關する施設は禁獵區九、銃獵禁止區域六、鹿及青鷲の捕獲禁止區域各一並獵區六あり、尙狩獵法及銃砲火藥類取締法規の目的を達成せしむるには自治的に狩獵團體の活動を促し之か違反を防止すると共に其の發達を企圖するを適當と認め大正八年狩獵法改正實施以來該團體の設立を勸奨したる結果現在四十一團體其の人員一千七百七十三名に達せり。

電氣及瓦斯 大正十三年頃迄縣内各所に十四、五の電氣事業者ありしか何れも事業の經營見るべきものなく多くは其の經營に困難を來し居りたる狀況なるに其の後財界の不況は一層事業を脅威し經營難に陥るもの漸次多きを加へ遂に縣外より資本來りて事業を買收し現在僅に七事業者に減し事業の基礎漸く確實となれり、然るに縣内他の事業者は之れに刺戟せられ各自其の設備並經營方針

の改善に意を用ひたると取締官廳の事業監査に留意せる結果逐次良好の經營に向ひつつあり而してこの固定資本につき見るに總計五千貳百萬餘圓（縣外に投資せる分を含む）發電力總計一萬七千キロワット、電線路亘長二千二百二十哩、延長六千二百八十八哩、需要家數十二萬四千九百八十七戸、取付電灯數三十萬九千七百七十八灯、同燭光數五百三十三萬八千六百三十三燭光にして一需要家平均灯數二・四八灯、燭光數四十二・七燭光なり又電力需要家數一千六百五十一戸、裝置數一千八百三十二個（換算キロワット數八千七百五十三）、需要家平均電動機數一・一一馬力數四・九四となり將來益々増加の傾向に在り、瓦斯事業は秋田市を供給區域とする一事業者在るのみにして其の事業極めて不振の狀況なり之は多額の固定資本を要すると需要僅少の結果なるべく其の固定資本は貳拾四萬貳千餘圓にして現在需要家數八百十九戸、灯用一千四百八十四個、熱用二千二百個、動力用三十二馬力にして殆ど増減なく供給成績は良好にして瓦斯の壓力及熱量は何れも使用に充分なり。

建築 昭和三年四月秋田市に市街地建築物法適用以來取扱件數は建築申請百四十二件、建築線指定三十一件にして昭和四年度に於ける取扱件數左の如し

一、建築申請四一件 延面積 二、一五一坪三一

内 譯

新築 三六件 延面積 一、七七七坪三六

増築 四件 同 二四八坪九五

改築 一件 同 一二五坪〇〇

一、建築線 指定件數二一 延長 四二六間四六

一、處分 二四件

本法適用以來約二箇年を経過し一般市民も本法を理解するの機運に達し加ふるに都市計畫區域も漸く決定の域に達したれば都市計畫事業と密接なる連絡のもとに秋田警察署の協力を得て將に都市建築警察の活動期に入らんとする狀況にあり。

酒類密造矯正 本縣の酒類密造は全國中最も多く從來官民協力して之か豫防と矯正に努力する處ありて矯正の度漸次良好を示すの傾向にあるも之を根絶する極めて困難の實情にあり然れども警察官吏は稅務當局と協調を保ち或は講演に或は一齊監査に不斷の注意と活動を怠ることなく昭和四年中に於ける反則檢舉數八百九十六件にして其の罰金額實に六萬四千拾八圓の巨額に達せり。

第四節 工場

工場的情況 本縣に於ける工場法適用工場は製絲業、織物業、機械及器具製造業、金屬品製造業、窯業、醸造業、電氣業、瓦斯業、製油業、製藥業、護謨製造業、船舶車輛製造業、化學雜業、鐘錶業、印刷製本業、木竹莖莖製品業、清涼飲料及製氷業、製綿業、水産品製造業、雜工場の雜の二十種にして其の總數五百六十三工場（昭和五年五月末現在）あり内最も多數を占むるは木竹莖莖製品業（製材）の二百四十二にして醸造業の百十三之に亞く、以上の外製綿業五一

電氣業四五、機械製造業四二、その他七十を算す是等工場に於ける労働者數五千七百六十四人内男四千六百二十六人、女千百三十八人にして前年に比し工場數に於て五十三、職工數に於て五百三十九人の増加となりたるは本年内に於て木竹莖莖製品業に屬する樽木取工場の新に法の適用を受くるに至りたる又小規模製材工場の新設等に依るものなるか財界の不振は愈深刻を加ふる至り大工場の新設は殆んどなく僅かに地方に於ける需要の必要に依り又は大工場の整理縮少せられたる影響に依り多少小工場の新設を見ることあるも一般不況の影響を蒙り經營極めて困難なる狀況なり。

就業時間は前年と大差なく最長十二時間、最短八時間にして其の間に三十分乃至二時間場合に依りては三時間の休憩時間を置くを以て實労働は最長十二時間のものも十一時間又は十時間以内となり最短の八時間制は七時間又は七時間半となるものあり休憩時間の長きは醸造工場にして約三時間若くはそれ以上に涉ることあり。